俄羅斯紀聞

六

早稲田大學附屬
圖書館
寄第 川田氏寄贈
第 20
第 6
出帶許不外
ル8
2994
6

俄羅斯紀聞

第六冊

魯西亞志

魯西亞國志世紀

ル 87
3038
6
ル 8 特
2994
6

魯西亜志 全

桂川甫周 譯

名義

魯西亜ハ往古沙布馬齊亞（サルモシア）と稱せし一國也千餘年前より
ホニヤ（加里亜国の地名）三人の諸侯あり其名成セクス レクス ロシス
と云ふ此三人コロシイ（加里亜国七地）より分ち出て各王爵の國成
開く即今の波布米亞（ボヘミア）入尔馬尼亞（亜国の地）波羅尼亞（ホロニヤ）魯西亜國是なり
ロシスの開し國なれハ其祖王の名を以て其國の名とし
て魯西亜と云ふなり土俗ハロスランド又ハウスランドと稱せ
ハ魯西亜の特訛なり或ハ其開國の始祖おもふに國の名

義詳なりしかとも後はコロニイとなり今はロシヤの
開きし新國なるかゆへ其名を少く國名とせしなり疑

魯西亞開國以來漸々に強大なりて其國人を三部
に分ち各々服色を異にし三州とす
其一をローデロシヤ（赤色の人民）（色一作魯西亞同）波羅泥亞の一部分の
地なり之を俗に波羅泥亞の下に載す
其二をウイツテロスランド（白色の人民）リタウエン（波羅泥亞の地）
今はスモーレンスコの所属となれり
其三をスワルトロスランド（黑色の人民）魯西亞の本國なり即

漠斯哥未亞國なり但漠斯哥未亞の名何の義なる事を
詳にせず其都城の地を漠斯可島と云ふ少其國を去
て漠斯哥未亞と称せり之なる所なり今西暦の三州を
合て單に魯西亞と称するは年曆千七百二十一年に彼得帝（ピイトル）
に當り始て帝號を称せし
幅員
魯西亞北方國にして七百餘里その廣さ大抵相如れ
近來西亞細亞洲の内なる大陸部の辺を侵略し漸々
廣大の地となりては昔とは其上に加へ近年（今ニテ）害隆亞の地を併せ得たり其地の廣

大陸盛なる中世界にて例を多ふ屬す國なりと

・海河

歐羅巴洲の寫海十名ありて其内五名魯西亞の境界に係るものを左に挙く

高い所徳海（ステゼ）一名伯尔昨答海（パルチセセ）雪降亞國（スウエーデン）の海灣をいふなり

白海（ウイロテゼー）　韃靼亞（ラアランド）の海灣をいふなり

氷海（エイスゼー）　北極界にあり

黑海（スウルテゼー）　度尔格（トル）の堺にあり

北高海（カスピスゼー）　百尔西亞（ペルシヤ）の堺にあり

右の外大河五あり

尼布尔（ニーブル）河　一名テチーブル河（リタウエー）波羅泥亞（ホロニヤ）の間にあり

其源いスモーレスコの北ウルコシスキ（乃）池澤の南より発し南に流れ黑海に入る河口の廣さ四里なり内に多く小島あり各林木茂盛なり河の中央廿餘里の間に海の如く越度し難し

度尔格と此処に於て數度合戰ありしなり

尼布尔河と同じ

勿尔尼（ウルガニ）河　其河源い他に出でるなり

西より東に流れて魯西亞國中を經て亞私太幅甘（アストラカン）の地より北海に注ぐ　此河水春毎に大に漲り発して此時に

テウエルの地より貨物を大船に載せ亞私太幅甘（アストラカン）に運送す

太乃河（タナイ）　一名ドン河　其源いレサニの地より起り中韃靼を経て
迂曲して里何的（メホチセ）湖より黑海に入る此河底沙多く水機
無春の頃水漲溢して船を用ひず依て船を運送する
杜（トウイナ）和金河　其源一方アルカニゲルと地を隔て白海に注く
阿汰河　此の方氷海に注く其源小にして底沙多し
魯西亜の軍船大河を登るに此河を指て加尔莫奇（カルミリケン）と
唱ふ此河中に多く鳴河あり
韃靼國始て帝称を称せし第一世伯多孫（ハテル）なり帝称（オル）
ハ湖ラトガ湖両湖より四尺十六七里ありて長岡を相連
なしを鞆南に河道を通し南北の通り水使船しめ
萬世の利を起ふ云ひつべき其功績の大なるを以て
後世永世に伝て忘るべからざるなり

陽界

わい雪隆亜（スウエーデン）亜い波羅尼亜（ホロニヤ）南い度尔格（トルコ）東い大韃靼（シーナ）
と接て近時亜細亜州の内に属し支那（シーナ）百尔
西亜（シヤ）と其境を定む

・風土

此邦幅員廣大にして数万里よりつづく地にして氣候の

産時は地の肥膏なること
西の方波羅泥亜（ホロニヤ）の地を最豊饒なりとす世に其大数を挙く
を産する地凡二十物の数の類三十餘種迦國の産物に倣ふ
るものなれども多く近隣の諸国より輸す
此方北地に氣候極めて冷に酒寒甚常にして地のま
甚卑湿なり多くは茂林泥沼の中にあり其野獣極めて
夥し土人多くは海に浮んで漁猟を事とす而して最
盛なるはウールラス（ニヂイル）ニルデルス白狐云狐（サベルス）狐皮（千皮）
極めて貴く「ルメレーチ」鼬の皮を産す此を以て華を表す
最上品なり其價も頗貴し産物い一物のうちに
ロスニカ一名ハールラトとも云ふ敏捷にして其性甚食を貪り物を
食ふ事口をとゝまり殺し生物を殺して死せる
ごとくなるも尾時は林のうちに入て三本の間に手足を
をいさみ食する物をもとめ手足毎食ゆゑ初のうち
とまりまる鞋粗の海邊（江中カ）に異獣あり其名をベヘモアトと
以其嵩大なること大船にて怖しき豚磨すれい
陸白光滑なく長毛なり象牙よりも長し
海江の中に魚鰕多つて鞋しく佳肴の学極に
おくり生産の食用に供し仕難の鉄鉛のごとく甚まれなり
果実の類いはうまきなり瓜の大なるい重さ三四

十斤ハ米原ものハ葡萄酒を製造されたるとき伯多
係帝之時レイシムーセルの両河間より移し植方を植
るハ亜私太蘭甘の土地ハ和蘭して他邦よりも強き勢術
なりそれより多く葡酒を造りおす古国なる植これ
も製造せるなり
本邦奎係ハ高麗し故よ移して製造
の料とす
此邦産物第一の佳品ハ皮革中皮蘭肉牛脂蝋獨芋麻
安曇等なり此とも他て産大の製造を為す
分界

憂衍

魯西亞の保世有り歐羅巴亞細亞の二大洲より保今
多く五部分
第一 イングルランド 礼勿尼亞舊雪際亞く地より今魯西
亞を保せる
第二 西魯西亞即布國の西くの方一部分し保ち
第三 東魯西亞即布國の東くの方部分を保ち
第四 魯西亞幅皮亞
第五 魯西亞韃靼
右五部くの内騎行と達箇長くと亞処十二処
一 諾勿尼的亞 二 アルカンゲル 三 漠斯可島 四 ニスノウゴロト
五 スモレンスコ 六 キウヨウ 七 ビイロゴロト 八 ウラヂミル并アリウ
九 亞私太幅甘 十 オレンブルゲ 十一 加山 十二 止白里
イングルランド 一名 イングルメルランド地名とこランドの海湾と
ラトガ湖との間る所の幅員六十餘里地勢卑低にして
歌言るに盛なり百五十餘年前い魯西亞の有りし
お中に汗雪際亞お良乙千七百二年お元禄十五年再び魯西
亞に侵せり汗四年此地お初めて王城を建設し伯多
祿帝の建られる都なるお以ペテルスベルクと名つけ
ペテルベルク インゲルミランドと大色おく魯西亞國第一の広襄
繁盛の地くお為古十年西鐵島と雜事 四十八度王城花

廣サ方二里許其間ニ大厦八千餘間アリ左城ハ八角ニシテ
河ヲ隔テ三川ノ島ヲ合ス長サ六町ニ築キ茅
一ノ島ヲハーセエイランドトシテ對岸ノ陸地ヲ外廓ヲ擬
ヘタルノ如ク伽藍帝ノ古像ヲ安置シ總石垣ノ
サ三丈餘免クシテ鉄網銅(ドウ)ニ大鏡ヲ ひゃるく列ネ城内
ハ宝塔ヲ建テ意太里(イタリヤ)亜國ノ良匠テレシニナル者ヲ
送リテ屋根ハ皆金貼ナリ塔上ニ自鳴鐘ヲ掛ケ時
毎ニ鳴ル音ツヽ鳴ル時ヲ報シ自音響ヲ奏ス是
和蘭ノアムステルダムヨリ送リシモノ其他偽物園創
建及ビ極彩微細ニ彫ル欄干ノ如キ殆ンド此ヨリ後ノ代ニ

ノ帝ノ廟陵ヲ築ミ此ハ定ヲ以テ彼宝塔千
七百五十六年ニ宝暦六年 天火ノ為ニ過半焼失シ
校築局ヲ設ケテ各社寺ノ古来ノ事常
ノ用第ノ旬倫如ノ図畫ノ如キ其局ニ寄
ヲ以テ 冠ノ時文形ノ磁器ヲ以テ収免貯ヲ第二
ノ物ヲ アドミラリツ島ニシテ五陵ノ廟ヲ擬ク四方ノ
大餘ヲ列ネ国ニ国ヲ内ノ指図ヲ画ケルモノ
異紋通形ノ儲ヲ設ケ側ノ大ナル国ヲ内ニ種
ノ木獣或ハ噴水或ハ役ヲ設ケ千七百五十五年 宝暦五年四月
ノ立物ヲ造形奇ク画捷絵集金器具ヲ奪フ実ニ

天下の壮観なり又馬殿象殿を列し皆百年西要國
甲斐国より城寨義倉を築き息せし也又鑄工治工舟匠甲冑
匠書画手伝有用の百工備さるもの第三の奇を
ロシリヤストローウと云ふ街を十二條に分ち通し
海岸をもつて二島を海形に沿岸の長サ六百餘間
伯多祿第二世の帝の造られる海に臨んで國を
開き宮殿をもつて一里半許風景絶佳なり
海岸に帝を立て夜に帝上に義を禁じ行海の者
を照す大庫を造て貨物を貯へ三ヶ所に某
為を立て学校を設く伯地ヨルガトガ両湖の間河
道穿通して大船往通す
ふるきおよつく金銀し常
に多く多国の使りも河すしるに伯多祿帝の行る
千七百十八年より享保三年土地越し両湖の間十七里を経
て廣さ七丈深さ二丈ほど河道を拏開く凡一千四年を経て
千七百三十二年享保十七年女帝アナの時に成就せり開河
の工夫日に二万四千人を用ら深さより依物し遠近
心のまゝなるおよそ土地に新盛窪庶なるい言ふ及ん
ば近隣の住民と其他沢を求ふもとさるいなく万
世の事業の大なる沢の原きを仰ぐる者
なりと

レイフランド
禮勿泥亜

北ハセンランド海湾ノ西ノ方ニ西富ヽ所徳海ヲ隔シ南ハ
コウルランド山接ス東ハブレスコウ諸島ヲ入亜ヲ接ス南
ハ凡百餘里東西六十餘里その地豊沃ナリ
穀物多ク産ス故ニ西亜の諸ヨリ北方の穀倉ト称ス
又多ク産猟魚ハ鯉鱈鯨ヨラシフレンチイル鹿皮ヲ
産ス土産麻ト布他の諸部ヲ威セリ羊毛ハ甚下ル
ナリ村市ハ松樹ヲ以テ家屋ヲ造ル人多ク木ノミヲ
屋宅ヲ造ル西洋の屋宅多ク石或煉瓦ヲ用ル事ヲ以ル
貨物ハ専ラ麻布ヲ織テ諸国ニ輸ス田畑ヲ耕ス
近ク百年
以来ノ開ル所ニ

貨物ハ麻布暦青諸国ニ輸ス ボフトアス皮革ヲ
西亜西亜
此地分ク十三道ニ分ル西亜 モスコウ 可島 テウエル
ロストウ ヤレスラウ ビーロヲーセロ シニスダル 傳羅得抹爾
以上七道中部ヨリ
ソスコウ ビールスキ レスコウ スモトレンスコ セリベイ
ケセルニコウ ユクライ子
以上七道西方ヨリ
諸勿尾的亜 ヤルガボル 杜水拿
以上三道北方ヨリ

縛羅苔（ラロリグ）　ニスノホコロド　モルトア

ウラロチン　レサン　ポル

以上三道南方より

謨斯可島　魯西亞の中北方より　世界録を即使敷可島

ムスクワ河辺より　北緯五十五度三十六分の地なり

千二百年（正治二年）の頃より魯西亞の兵強くして歐羅巴第

一の大城なり周圍十餘里人居凡十五万家其面を四

方に分ち各石垣を築き堡塁設けりく国を守る諸寺

石造にして砌成し三層の博物館を設け屋内を煉土

おく築かれたるなり　園囿を設け喜樹を植る諸寺を

を造り形り多く噴水を造りて器物を飾る又その

寺院の第一をソボルと云て宝殿九座皆鍍金の銅瓦を

用ひ門戸に皆優金の鉄版をもちふ故に日光に照て

孔雀光輝燦爛たり　眼を射る第二をシントシーンと云ふ

魯西亞王の廟なり　第三に結を石死の寺なり

此一如きをビンチンスタードと云ふ　内街と云ふ法なり

第二の構をキタイゴロドと云ふ　又支那街と称す　四囲に石

垣を設け諸寺を設け　国形方形の博物館を設け　連列稀

屋宇に皆瓦を以砌成す　又石橋を架くビンチン

スタド　和漢すべて橋の製造極く拙なりとおしたり
内に武庫家院書籍第局を設置し玉石等を用
ひく最も良成せり之員の大都六千餘処あら
ざるの貨物をうり捌く故に繁昌する
第三をヘルコロドとなす又白街と称す周囲四哩を以て
石垣を造り立る故に名つけしなり城の形半月の如く
なる内に百五商賈倫敦の如し　又本邑事務
本を以て長を送る事既に四年し御厳命を
蒙る而千俵給金養居等何り此街まで繁昌たるビイ
ル酒の名産　味美良
もっとも上品なり

第四ハセメラメイゴロドとなす周囲堤を築き二門の石門
何り度数測量と字機何り此不毛密皆亦を用ひ
和時大災有
テウエル　加尔瓦河源和何り蒼別より長長何り今ハ諸
加瓦的亜の和蘭と為り伯多福帝の　セナ山河を
繋通しひくより今ハ海和千屬まで富ハ和徳海
和船を通る事を為るく
ロストウ　謨斯可島の中央何里孝俵の堤
ヤレスラウ　加尔瓦河岸上何り
ニイロヲーセロ　加尔瓦河の西和何り古ハ別和君長何

りしく今ハ諸勿瓦的要ニ属ス
ビスダル　亦勿尔瓦沿岸ニ
縛羅得抹尔　勿尔瓦オカ両河の間ニ
あるを意ス今僅数可島ニ
フスコウ　礼勿泥亜と堺を接ス千五百四年より永正元年
布國ニ属ス
ヒイルスキ　波羅泥亜の堺ニ
レスコウ　リタウエンの堺ニ
スモーレンスコ　リタウエンニ堺ス年表布國波羅泥亜と
此地をはらそひく数度合戦ス千六百八十六年貞享
三年布國ニ属し縣府を建蔵長を立く
セヘリイ　布リタウエンの堺ニ
ケセルンシュウ　波羅泥亜の堺ニ
ユクライ子　波羅泥亜の地ニ
諸勿瓦的亜　北雷陸亜ニ接
しる縣府を建蔵長を立く
カルカボル　白海に陸す港勿瓦的亜ニ附属す
杜木拿　杜勿拿河の白海ニ注く河口の邑ニ
カンケルニ縣府を立る
縛羅苔　アンカンゲルニ附属す

ニスノホゴロト　オカ河の勾配河と合する処より河の分別
あるを記す
モルトア　トンラカ両河の間なり
ボル　韃靼界なり　其地甚だ大なり
レカン　南小韃靼に接する地なり
ウラロチン　韃靼の堺なり
東魯西亜　此地多く七道あり　西伯　ナウセン　ペトソラ
ヤレンスキ　白爾米　ユストユク　ウイアトスキ　ケセレミウシ
メウセン　白海氷海に臨む多く毛の地なり但材木
多し

ペトソラ　地氷海に隣り一ワーイガツトの海峡に臨む地
廣く多くの民居あり人民少なし金銀極く少し
海に氷陳して解けず　アンカンゲルに附属す
ヤレンスキ　其地多く峻山茂林を以て賦税とす
白爾米　北に則て塩を接す漁獵可為を事とす
凡二百三十許里海を者に塩を製する是を以て生産
をなす者二万餘人
ユストユク　杜布拿河岸なり河を此地のまゝ多く茂林に
杜布拿河沿岸に人民多し
ウイアトスキ　加山に附属す

ケセルニツシ　韃靼場より北へつゞき射をよくす

魯西亞慨況亞　此地の伝に俗に曾陸亞の下に載此地

白海の沿る魯西亞に属しる三州を奉く皆アルカン

ゲルの首府より隷す

ムレニレスコイ　ジポリイ

テルスコイ　レポリイ

ペラモレスコイ　レポリイ

以上歐羅巴洲に係る

魯西亞韃靼

此地は亞細亞州の北境に近く近時魯西亞の保有也

地なり

小韃靼　歐羅巴度布格に属す故に真伝に亦度布格

の下に詳なり　大韃靼　北境の地は今皆魯西亞に属

するゆへ略す　俗に魯西亞韃靼と云ふ

魯西亞吞保の地　亞細亞に係る　歐羅巴州より

在るゆへ廣大なり　東西凡千三百餘里　南北凡百餘

里　その風土　一様なるに南方の地は歐羅巴の風土に

似て地味豊肥　穀類多し　その方あるを東方の地は

嘗山林曠原多く不毛の地多し　止白里の係る伝説の

如く絶く此地なるゆへ左の各地を保有する

其西は支那国より路府級を経する所に初め設し十二ヶ所
の内第九ヶ所の四ヶ所を称
加山（カヤサン） オレンヘルク 亜私太（アシタ）幌甘（ホロカン） 止白別（シベツ）
此外高萬（カウバス）砂山此辺の地は
加山 此地に勿尻（カヤシリ）河辺に何れも加賀（カガ）何此地の中分を流る
勿尻河に入る此河に何れも会する由尺の牧牛多し此
土の人他の鞋を以て此れに代用し
民物を使役し奮此地に君長あり礼節を解し地理に明るし
廿一年 魯西亞に奪はれ 千五百五十二年（天文）
其後路府を置く番兵を
置く新しく土地を発見する鷹の加山に比すべき数信
の地を見れりスルガ の地に初め度布格の所属なり
城を蔵仲を逐て今に加山に属せり
加山 即此地の首縣にして市街屋宅数華整なり
勿尻（ウシリ）河より黒海に貨物を運送して度布格（トフカ）と大
交易を為す土人は支那の人を嫌ふ雖も其多数
郭に在りて砲術を他の人家柵に皆赤紋を
以て造る寺観五十餘座石造り 造り千七百四十九年
寛延二年 五十一年 宝暦元年 六十五年 明和二年 三度の大火にて人
家悉く焼失せり
コサイスノ 勿尻河岸に河

ニルメイス　加山北西ノ河ノ
サニラ　勿尾河の支流サニラ河の岸ノ河ノ
キムラ　勿石尾河岸ノ河ノ
ヴルカル　加馬河の近傍加山の西二十里ノ河ノ邑ノ
ヒイロイセル
シンビルスキ
セイルサン
サヲトラ　皆勿石河沿岸ノ河ノ邑ノ
オレンベルグ　今魯西亞ノ縣府ヲ置ル地ノ舊ユハ
の有ノ事地ハ加山ノ傍ノ加馬河ニ入ル山勿石尾河
の間ノ河ノ事此ヲ土ニシテ南ヲバシキリトいふ其
土俗ハ髭ノ中ノ多ク男猶ナルノ長キ白鬚多
曜服の衣ヲ着僧帽ヲ頂ノ戴ク常ノ
弓箭ヲ帶馬ノ乘る佛教ノ奉崇ヲ今ハ
魯西亞ノ天教ヲ布キ孔子ヲ寺觀ヲ多ク
しる人家ハ多ク二八河岸ノ居住數畜ヲ養養
きる事ヲ產業ノ土產ハ穀蜂皮革猪ヲ多ク
多ク俗女色ヲ好ミ良馬ハ七頭ヲ以ク一妻ノ換ル
るといふ千七百三十五年ノ享保二十年　女帝アナ縣府ヲ建
ノ酋長ヲ又教道ヲ設ヲ
ノ教ヲ死後ヲ人

の俄遠なる風俗殊判御世さらに新しくこそ

ユハ　ユハ河岸の河口

ボルシンスコイ

オルセノイ　並ユヤイク河辺より木柵を巡く周囲

のようなるをなす

コンガル　此地より大なる地窪河口の狩人居れ

ども実の天遠なり甚奇観なり

此地の大山河口ユラルと名く多くの玉石鳴海の属を

産す

亜ア　私タ太　横ラ甘

地いわゆる海岸勿布尾河岸より千五

百五十四年の天文廿三年魯西亜の俳諧なる地を新発見

候なり此地を兵庫島発見候なり伊多孫帝レミンケーセル

より葡萄を移し植る今其茂る西の方里海より

流るるあい沼河地あり塩を煮す大功の晒れて自然

の結晶し全く道炭のごとく貴重なる次

之なり価大なるなり

又一種の奇草を産す　ミカーブスコロイト　此俗羊ケ

草を抽く実を結ぶその枝羊の如　其皮の毛絨生

そ此を延傍の州皆敷の蟲なるあり実践

刺い毒汁ありまく血のごとく味噌の仮ごとく又分

ガ尼河の之海ヲ渡シ河口ヲ
ステウルと云ふ魚を捕る
其ヲ加非亜ガ尼と云ふ西亜ガ
亜ガ尼と云ふ諸邦ヲ
販賣ス最モ廣大ナル交易ナリ一年ノ間ノ人一人
ヲ八万レーキスダールデル金銭の名目
ノイクリを買ふ
事アリ
西私太蘭甘　即此地の首縣ナリ　加尼ガ尼の河口ドルコと
いふ島ニアリ人居稠密ヲ
く敵数樓を立て要害嚴重ナリ　ガ尼ガ尼華美甚
壮観ナリ城門十六ヲ
ヲ掘四十六丈廿二分の地ヲ
ヲ以て暑を防ぐ冬温暖ナリ
ガ尼の如き最大の河ニ
て車馬ヲ渡シ海ヲ渡シ常ヲ度ヲ格
西亜。印度等の人此地ヲ河ヲ
百貨駢集リ人烟輻輳シ
塩鉄ヲ以て交易の貨物ヲ
カリイセニ　ガ尼河岸の山ヲ河ヲ
く城ヲ為ス
カラスノイヤル
ツケルノイヤル　並ヲガ尼河岸ヲ河

ヤイク　ヤイク河海に流れ魚を捕ふ人家多し

加非亜（カフヤル）を以て交易致す

此地いどん勿（ウヨルガ）瓦河の間に流れ舊ラフカミシンガ

と云ふ流れ河り一いどん河に入り一いどん勿瓦河に注く

其間たつかに二里許を隔て千七百年より元祿十三年伯多祿

帝此河に幾遍しべテルスベルクのラドガ湖より船を

発しウヨルコ河より諾勿瓦的亜海に流りテウエルより勿

瓦河に新河を通ずいどん河に入る大ヨリアメウに出り

黑海を渡り公斯當丁（コンスタンチン）那波（ナポリ）に度る枝の名抵里地中海を

過き巴尔德（ヒブラルテル）峡より歐羅巴亞米利加二大洲の界地中海の海口へ

ゝ海峡を踰くノヲルド海に出ソレド灣より寫ゝ所德（オランデビー）海に入

く再びペテルスベルグに帰る其間迂曲轉回船路凡四千四百

余里三年を経て一週終り此船路の為らすしより西

羅巴諸國交易の便我邦に比すれ百倍せり　皆伯多祿

帝の仕事なり

止白里

名義　幅員　隣界

羅甸に止白里亜（シベリヤ）と云ふ（シビル）と云ふ語の轉ずるなり

シビルは支那の首縣の古名なりて今地トボルスキの南の

方魯西亜と阿比（アビ）河の間南北二百餘里東西百六十餘里

の地を止白里と称せり今ハ亜細亜の小陸大韃靼大半の地を総称して止白里と云ふ此ハ氷海より陸し西ハ魯西亜より接し東ハ直ち大東洋に臨み即亜細亜の西北部わく亜墨利加と界を分つ処の海峡なり南ハ支那特エタルタ土韃靼に據て接し東西尾一千四百餘里南北六百餘里なりいわゆる魯西亜韃靼と称せ〻ハ亜羅巴の境魯西亜国に附近の地のみなりしを以て今ハ此地をもく尽く亜国に服属せしめて総称して魯西亜韃靼と云ふ

河

魯西亜国に係る江河ハ既に上に詳にせり此に其余属の地より流るゝを挙ぐ

エニセイ河 一名エニセア河阿吉河の東二百餘里に流れ北の方氷海に注く其間凡九ヶ処を韃靼語にケムと云ふ

エニセイスコイの辺に河身甚闊大にして氷閉冬に

お廣サ五百七十托 西洋の一托ハ曲尺七尺五寸なり 春夏の間のみ漁業す

八百托 水深 河中魚鱗稠多なり其他方の人

お比をれい 甚多なり

ハ十河 近曲して遠く流る

注く河中に巖石沙礫多く舟楫難し海陸共に易し

以河口の西者より氷結す

アナヂル河　カムチツカの北西より聖多黙峯の東より大東洋へ注く

黒龍江　一名阿母兒又アムウル又サガリイン共に其河口の東の方にサガリイン名高き連原八百餘里魚類多く鱗しあるく後略

風土

正白黒の地い廣大にして氣候一樣なれ共南の方並に西南の方い地そこなる肥沃なれ共北の方い多く峻山曠原にして硬確不毛なり而累實を產せ

ず故に土人い只打魚狩獵のみを產業とす北方い地氣極く寒冷にして一歲のうち多くは冬の氣候にして河水常に氷り地上に積雪三尺夏の氣候に少しの間なり其頃い雪消して地上の深さ二尺餘なる所あり雷い甚まれなり多く材木を產すれ共人民の方い荊棘叢雜なるのみにて作る穀物なし南の方に畜養多く國人牛馬羊野羊等所有又猪鹿を產年毎に北方の諸所に移送す其外野獸の種甚多し皆以食料とす

元門　鹿野羊羚羊　トーン　ヒラシツ　レンヂイル　野猪兎狼黑白狐等有り又狐の皆上に黑き十文字有るもの有り

サベルス（ルメレイエン）ミルテルス　ウエセルチイス　ユーキホーンン　水牛ロウセン
リエクセン　ビサムス　麝獸等有之多く皮革を製す　就中ラ狐
サベルスは此州の名産とす　土產の皮革は本國に輸し
それ分西羅巴の待ち為ち始く價ひ高貴し
此地を以て本國に多く恐怖を與ふ　死罪の者は
戰鬪に於て傷ひ殺し人を遣し　サベルス　ミルテルス　ウエセルス
等を捕えそれに食を給し　絵畫を捕ふ　其數
數あり　其價長日に為て上騰し　數の足らざる者は罰
を加へる　其他廣大なる部分　土侯部落　本國
の人と多く居り　居所定まらず　蒙懸牛脂　ベーフルゲン皮革
等を以て支那　特に韃靼及び亜知默泥亞等の人と大
交易を為す

係有

昔者此地を曠漠韃靼と稱して本國かさのみ心を
延蔓の強盛なる國と服屬して居りしと伯多孫帝
の時に至りて阿比河より以東大韃靼の東方の屋須大東
洋に至るまで悉く委俘すと雖も百餘年前アトル
ヨの陸より四の正白里の地にまで本國に服屬せしめ
それより之を東の方に侵掠し　ヤマスク　伽東南門尼
知即堂　の地に至て支那に服屬するに至る　千六百

八十九年（元祿二年）ハ其界ハ城を築きて國をなし其他の地ハ悉く伯多祿帝の時ハ其國ハ廣ひて又千七百二十五年ハ享保十年船司加比丹（リンクスパーシー）（ルガツキリコウ）三人ハ命して此地の圖志を送らしむ伯多祿帝崩して後千七百三十年（享保十五年）女帝アナの時ハ其國始て成り夫より以來地形の曲折次第ハ多く國土を為らさ支那カムシカツトカ等（ママ）の諸國の說詳審をなく行徒に安穩なるなり

分界

此邦の大酋長ハトボルスキの府城ハ長崎その次なるものを

トボルスキ

エニセイスコイ

エニセイスコイをイルクツキとみなおくまつく分て三州とを

イルクツキ

各州ハ數道を分ち郡縣をこて立夫しハ酋長をおきて聖意に心をその各道ハ地に著しきもののみを

スキ載き

トボルスキ　旧止白里の往國なり魯西亞の東界に隣る

その地ハたかをトボルと云ふ故に其國を名つけ

ると

トボルスキ すなはち此地の首府トボル河の名をおけり
緯五十八度十二分の地に府城を山上に築つき止白里の
大酋長此地に居る千五百五十年和天文十九年こゝに城を築
入名馬泥亜の学校あり支那各等和蘭の商賈
和此地に舎一防寇軍ゝ番所カラバ護送を設くはあ
をるあり常和此処に輸移し陸奇の貨物あつまり
さるものあり土地もつとも肥富まて穀食豊に賤きあり
土人に学業をもとめ勉めもとめて衣食をもとめ
あり

チエリンスキ チエリン河岸和あり本柵を設く城を築く人
居三百餘家
ベレゾウ アビ阿比河岸和あり ワーイガフトの海湾に臨む
まつ本柵を設く城を築く
カタリナンベルク 千七百二十三年和享保三年伯多禄帝創て
縣府をおく千七百三十六年元文元年女帝カタリナの時に城
成きよつて其地に名付くイセツト河その地に河あり時に
河水流り漁多く魚を取る魚和多毒に堤成築く
あれを防く此地和鉄山あり此邪第一の橋和く縣
く人夫を集り者に安盛なる地なり み病院学院
学庶等あり

ナレイニ　阿波河岸ヨリ北ノ方五十九町の地なり木柵を以て城堡とす

トムスキ　トム河の阿波河より注く河口より陸路を通商長を置く此処に防禦軍を置て支那の貨物を領勢可島より移すみ蒙古和蘭莫斯科と互市の大場之

クスチスク　トム河岸ヨリ阿波河此地のビール酒名産上不有り

み焼酎を製す魚を以て食とす　ナレイム以下ノ三所

千七百廿六年享保十一年トボルスキに属す

ハラバ　阿波イルチスク河の間なり

千七百九年宝永六年密陰亜を保護の為兵を遣す

様子原土卒総て白里より道一千七百廿一年享保六年まで

の習より多く此邦を保護し

エニセイスキ　トボルスキの東ヨリ阿波イルチスク河此地の中央を

流れて氷海に入る故に其地を名くれいサモイデンなり千

五百九十四年文禄三年六年中その習和蘭の人来れり

印度地方を通する道を求めんとて始て此地

を見る地い小猟場内に住て住宅なり　エニセイ

ヤ河の間ヨリ人物いたるもの稀異なり猟を

猟とす　て魂魄なきもの　いかなる面色蒼黄

目長く類皮膨脹して氣を含む弱く夏い魚肉を

服とする者多い獣肉を食る位一枚のまくみくを身よりまとあなり始人と称れし上穴に肉よりすみ常に剛文を以て腦脳獣を捕若魚獣肉を食ものを一種の夷人称りトンケシ河辺に居住かるを即ちトンケシと云ふ人物中等の大さわく面色黄赤鼻高ひく目わるりわ見て時より面上よりまを里の家を以て皮を縫く文を為て わ見るをるくるるみく婦法をる古い俗服を衣のるくせしるり尤その仕方を器工拙河り土人い皆天毒を奉しいまる佛毒あるるを去ては大抵一夫両婦或い三四人を如ふ河り兵処に大るるを

おりて彼此る還稽をるを便りとし牡牛を男悍るり者を物肉を嗜ンチイルの皮を衣を今皆布国を民に奉をる布の皮革を美好るり皆以て貨物の料

エニセイスキ　即此地の首縣みく此物五十八度ら地

るり　エニセイ河辺を河り府城に子七百三十二年に文保十八年新に建るる布なり武庫大業庫河り土人い異酒惰弱みく酒を好み毒を以て徴賦を毒ら

とのなし

カラスノイニルスキ　エニセイ河辺を河り馬牛羊を産を

易して金銀を得 地肥沃なれども人農耕をつと
免れず

イルクツキ　此白里三州の西此地より廣大なり東
大東洋を隔て千六百四十四年和正保元年 古國ふにより此
地に一種の夷人をヤクテンといふ河岸に沿ふて居住
本枝を編て古角より屋敷造りて住む牛馬羊豚等
衣服は古國の服に似たり男子は髭なし女は髭
を結ぶ物を甚だ愛す捕獲せし貨物
なるを以て性猛悍強暴なり食肉
は何にても喜ぶ隨て食物は鼠とモルムヂー
ンを尤も愛す

イルクツキ　此州の首縣なり本國から亞和の商長此
地より長彩人家を移し城上わく大候十七門を設く古
國の商賈つねに此地に來て支那の貨物を貿易す
故に他邦の貨物此地より古國より移別より價いと
しき多し土人は甚酒を好む

イリムスキ　イリム河岸より北極五十八度に地あり
土地甚寒候人民貧窮なり北極に接して服屬なり南は
大湖なりバイカル湖にして多くサルを產出す湖中より多
く魚獲り不ト日温泉沸出す此湖中のサルは黑色

なり

ブラニナ　アニカラ河辺より　南国の人多く来り長崎駅
と牛とを以て大交易をなす
セリンギンスキ　セニンガ河辺より　千六百六十六年寛文六年博多
第支那鞋靴と彊を固め多く倉庫五ヶ処あり火
第器械等の庫戦車　周り皆山にて地五穀ふまず
なり
エヂンスキ　エヂ河岸より　流れセリンガ河に注ぐ東南に
支那の堺より接す此地諸教を信ず俗多く穏
エルシンスキ　黒龍江の岸より　河り此路五十二度の地なり
千六百八十九年元禄二年城郭城第支那と彊を固め此
所より北京と交礼の使節を通す
ヤクツキ　レナ河辺にあり　北緯六十一度の地に木柵を以
て城とす其地魚猟盛なり土地田畑おのずから成て
土人農業を事とせず　カムシカフトカに属す　今ハコフコイ
オホクミンスキ　の酋長より隷す此地の
ウエヂンスキ　英ホシナ河の南方に河
ナコフコイ　其地廣大なる事　正百里東北諸物の最
も其北に氷海ふまり南ハカムシカフトカ海に臨む土人

へ備前を奉す其首縣へ北極五十九度(デルスベルグより
百十二度五十三分の東方なる此処より舟匠をおき船を
造りくカムシカツトカ海渡る
ユカゲリ　氷海沿岸十何
ツクミツキ　二白里の東北隅方何里土人等順方鯨の
歯を樹方兒のさかりを孔を穿とる
オルトルスキ　カムシカツトカの東南方何里此地石狩国
方狐皮を時し拒敵せし方年方近隣の佐州を国より
招属するをもて今い賦税をとり如するの方なり
コレイキ　ペンシンスキの湾上より何里地名廣し土人常
ぶ其居処を遷移し定住の処なし其俗りつき
男猛方して暴戾なり人死をれ一その屍を焚く多
くレンヂイルを産す年毎方一万二千を貢す
ユデスキ　北極五十五度三十分ユデ河岸より何里支那
より博を接す
アクランスキ　ペンシン河岸方何里此極方十三度三十
分の地なり
アナジルスキ　此地の東北頭アナジル河岸方何里小極六十
六度の地へ入り全く本国より招属を以此地の
南方大なる島何り三面陸地方接する地を言ふ　これをカムシカ

フトカといふ

カムシカフトカ　其地より大河あり　カムシカフトカ河といふ　北極五十六度三十分の地より流て大東洋に注ぐ故に其地わかつけるなり　日本おく古奥羽越と云し　地之此い北向里ゆ得を接まる　みち五十九度三十分の地よ

プスタヤといふ河あり　西ゆ流てベンシンスカヤの海灣ゆ注く　此わの接往古也し　時に日ゆい其中地ゆ有る山を東の海濱より西の海濱まで　又南を北ゆ行こと二百四十里　その南を隔のゆクリルスカヤ只千カと　いふ北極五十二度三分の地へ伯多福帝の遣られし

ペテルベルグの都より一百二十七度東ゆ有る　此地い高山多し中分の地に一帯連綿てし　皆山なり　たゆく石山ゆく不毛ら地なり中ゆ三つの大山有り　その上より常ゆ烟を吐て時ゆ焔を揚し　灰を飛す　一山をアハシンスカヤといふ　一山をチルバシンスカヤ　一山を　カムシカフトカといふ　此山高高し　晴る日ゆい六十里の外　ゆくゆる山の御國里十方五千　丈八十一里四十間餘　年ゆ十四三度灰を噴おて　年有り時ゆ多少有り多く時い八十里　四方ゆ灰飛ばし　深さ二尺餘ゆ積　千七百三十年　元文二年　大きゆ焼おく石及ひ種々の色なる硝石　硝石　硫黄

石の火ます燒化ふきあがせ
ヤ[illegible]又温泉極く多し海
辺の山脚より拾く池を為り一里許の所に小き石山よ
り流く流れ出く海に入る海さ四尺許廣さ三丈餘又佛曉
しそおびたゝしく鳴り響くけり又家を伐れく
呼吸い濃き烟を発しく三四丈に陽りしるあいの又
へるよりあるけり温泉の水面より黑きものゝうきつる
けりまよつみに洗そよおちてし
地震海嘯に為しけり火山のけうりいけみくつゝき
ちすり
氣候に一年の内八月に多し南の方に常に雪の深さ
大抵一丈一三尺山の方に雪部に多の氣候に雪
絶し松の五穀を生せず但ヨーデルホルト ナムシカフトカ
畑を作るく雪に五穀まれ又風浪に常に冷
しきなり塩と鉄を除き故に高價く
土人皮草の乙魚獵を大なる富を設けり
元来カムシカフトカは常に家を構しるく其人家は大なる法色に為
迫り家を構しるく其人家は大なる法色に為
黑く髮の色黑して直く面開し鼻大り目深く眉
うすし無ひ髭に疱瘡を皆法海の水
丹後毛を飲食に生ものく織し蚕る物の物を

ひとる蓋をそのまゝ樹皮にて被せ用ひ
居おいまを四五尺堀こくそのうへ
を造る土或いは草おく置かなり四角なる穴を穿て
畑地一明をとり出入口より為用ひ打漁猟
なく業とるそ夜間に獣皮を用ふ家畜いなく
の骨獣の角等をもつて武器をつくりそれを四縛ら
くみして用ひる也西亜より来る外に金鉄の乗
る事なるさきり大を多く繋く旅りのさき雪車
をひかせる
書をいつまて二人三人居をもつなり家夫好通い
常の事なれる風俗なりとし蠻生なれいはその一
を殺を以前に土人を聖鄙四郡悪酒なりしを国お報
復して後千七百四十一年寛保元年女帝の命を遣しお
天教の舎士等を差し土人を教導せしむるおち
て日に月とる教化を行ひ道理に帰依せれい
遠くに有道吾良の民となる可き又一種の夷人阿
リクリレスとてカムシカフト南岸近傍の海島に住む大
抵カムシカフトの人物と同し但その絶乗を毛を生ずる
と異なりすなわち犬を用ひ雪を運ぶ男は皆長髪
中半を黒くする男女共に耳に銀環をかけ時り

暗すその習ひ種々の極度をいまだ未だすること能はず
居るもの多くシカフトカの間しば飢食ふの事あるを以て方之
魚肉及び海獸の肉を食物とす其失をいきどほりて
つゝみ行ふ祭祀の神をイコウルといふを崇
み木をうゑくけつりまうみて幣のごとくし（祝詞をイナヨモと云）
獸をこの所しば狩りて得へ魚肉をも食用とす
人死されい死い事は埋みるゐ出中は葬礼
魯西亞の此地を始るいチ六百九十八年ワ元禄十一年アタラ
ソフ一軍を帥ひ（ニーサフケンユカヂリ）およびコレーキすり此
地わり土人を大半服従せしめ千七百年（元禄十三年）
ゝ七月ゐ玉國ゐ始るもの始百ゐ廿ゐ廿ゐ廿ゐ三千二百張
べーフル（ラフコるゝ俗名ゐす）七十七領四匹白色の狐皮十張赤狐九
十一を帝ゐ獻し自始るゐ廿ゐ廿ゐ皮四百張なりゐ後
千七百十五年（正德五年）ゐ再び軍勢を送しペンシンスコイの海
灣より北シカフトカより海り其地いりろろん近傍の住島
ゆそうゐ居ゐ千七百三十年ゐ（享保十六年）土人魯
西亞ゐ敵対者しゐ程なく降伏ゐ後ゐ今ゐ
ゐるゆそうゐ年ゐ始りゐる賦貢ゐ年毎ゐ人別ゐ
ベルベーフル（右三ゐ）ゐ何ゐ（ゐ）皮ゐ枚ゐ、ゐ（ゐ）中ゐ
此地ゐ魯西亞ゐ城五座ゐ

一をボルケンフコイといふボルスカヤといふ大河の側より
ペシンスカヤの海湾を去ること三十三ウェルステン（一ウェルステン三百五十丈）の大さ四方四十九丈オコフコイ通商の船多し此地の産物
集多故に毛皮等盛なる事なり
二をオフプルホルトカムシカフトカといふ五ケ所の内此城より
も古しカムシヤツトカハ河源を去ること十九ウェルステン
ホルスケンフコイ高此二百四十二ウェルステンあり倉庫武
庫を設く
三をチーデルホルトカムシカフトカといふオフプルホルトの長信三
百九十七ウェルステンカムシカフトカ河口を去ること三十ウェルステン
城の廣さ方二十八丈周囲あり本柵を搆ふ
四をアワフカといふ千七百四十年（元文五年）アワフカ河の港上に
あり
五をデキルといふ近ごろ築きたる城なり デキル河辺にあり
此地の属物拾く多し 著しきものを左に挙く
クハリス諸島カムシヤツトカの南岸に接り西南の方に連綿
しく散在す著名なるもの二十五島なり頭しるしるの数
を知らずカムシカフトカに附近の島々に南國に近へ
遠ざかれる程に名し商長ありておさむるなり
ゆるしを地地震多く又火山あり日本と変異

專らなす又日本近傍の島〻小一種の毒草を生
ず（即附子根大きさ大黄のごとく色黄なり）泊天藍の
葉に矢おもりて獸を毒す又ユルペ（ユルペの島〻よ
てゴランドチツチル（文〻類）を以て布或織日本に本邦鉄砲
を多用ふ）

又一大島あり其南の端を松前と云　往古より日本
より蝦夷と云君長を置ふ又カムシカツカすの
海路ふクナシリ島あり（エルプルトの三嶋を日本にく
いすへく蝦夷と云）

ベリングス島　大東洋のうちあり（カムシカツカ河口を
さること六十餘里）千七百四十一年（寛保元年）船司ベリング
ベリングス始く此地に到り其年八月此地に卒す故
に其名を以て此地を名付く廣サ四十五里許二十
二十五ルステン（一ルステン三里）堅微なる石あり地震多し晴
る日は此島より和国を望て雪山を見る形すること
ろ四百九十丈（此嶋里列加の山なり）

チラメデス島（ミトラウレンス）北緯六十七度の地なり

聖老楞祖島　亜細亜の東北隅に在る千七百二十八年
（享保十三年）ベリング始く此地に到る絶嶮にして人なし故
に後再び其地に到ベリングスに多くの嶋を

開きたる彩のごとく北亜墨利加と西亜北緯六十度
の地を開きはじめたる者まで北亜墨利
加の西辺六十五度の地を発見せり又千七百六十三年の(宝暦)
年に英国より船を発し氷海を越えフリーツキの北岸頭
七十四度の地を歴くみ南に向ひ一の海峡を渡れば
是亦亜墨利加の西堺なり亜細亜の東北なる海峡と
又七十四度の海上にあり多くの島を開きは其土人
みな皮革を衣として家を為す其土人
武器をおきくれとを不知ゼルリンガス島
住してアルクニトと話ずるなり此亜墨利加に属せし
地なり
此海峡を始め陸海を住居するもの
此処にあり亜大洲の間(両大洲いアレヤ アメリカなり)後に六十里許
そなりて其間めぐるの海に有故大船みくに渡る
ふるに今い亜墨利加の人々欧羅巴の教化にく
昔のごく殊異に倫の伝来されいに船を用
ひざるのみおそるべきに上古従るく
延宝大韃靼止白里及東方諸国に通ずる海路を開
きはじめく魯西亜の氷海より船を発し止白里の海
岸に沿く遠くカムチカツトカに至り初く新墨白墨の

島なる事を明白に知り得たり　但西海海路のもの
報陰に乗り氣候穏なれども害く常に層氷を生ず又
朝勢きびしくして烈しく異風吹出でしれい金船
蓋搭する只海路のみなるに止白里頻海の地を
時と風濤のうねりを受る事なしいつ
高嶋沙山脚の地に和方海と異海の間甚く亜細
亜欧羅巴分界の和方のトン河に際し熟河を
入亜に接す地形方形にして縦横二百許里大小韃
靼より五日家を構へ地元乗り千七百二十二年享保七年伯
多禄帝此地を併せ治る

止尔加止印　暗負百二十條里一分い魯西亜に長公一
分い契利辛に属す
上俗い田猟農耕を業とし人畜を産する成
るも此地の婦人極めて美麗にして常に新様の衣
服を制新して装ひ如き新四い教法を奉ず常に又良
馬を産するのみ徒駿なり　價高し甚貴し
クバン　アソウの西隅に位りしかも度々格闘に属せ
魯西亜に屈しなり伯多禄帝の時に
女帝アナの時千七百三十年享保十五年迄りて強く服
従せしめたり

ヤハルデチン　亜私太幡甘の近傍にあり左右二於て分つ
タゲスタン　此海の沿岸にあり百児西亜と壌を接
せ土人四し教を奉崇す此地にくちとと百児西亜
と大交易を為すそこの貨物は北海より船にて運
漕するなり

魯西亜人物

其人長大にして容貌端正なりその性柔和順にて
てきそく事壮果敢事に臨んで動せず飲食に無
菫青菜書葱胡瓜魚脂の属焼酎を常の飲とす
午時の後晝寢数刻温湯に浴し幼稚の
時は歩行せしめず食後沐せしむ常の人は烟草を
のみ呂宋烟草を用ふ軍人は烟草を吸ふすく
焼酎および酒をもつむ
平常閑居事なき時は他邦にはなく事を執者の
用ふ古今年異邦と倫理を変せざりしを按み
ありこの事を考れいやまたれいやまたこの事成得れ
いものとして重く常用ひらること
衣服は入名馬泥亜（ヒルヤ）拂郎察（フランス）の制を用ふ最華美整
楚なり常人は絹布を用ふ

賤人は髮を剃らず
家毎に浴湯を設く
行路は互に鞠躬を尚ぶ母
屋宮器用は多く農夫の位卑宮等の事は詳なる
言語はスラホヤの語に類すること今は厄カリヤス西亜語
まし然用ふ
文字は二十四字有り
元亦魯西亜丹航海の法なり伯多禄帝の時より
つまあて航海の法を調煉せしめ其術に巧くな
りその後女帝アナの時に至りて水戦陸戦共に
その法に熟煉せしは度々格鞨靺等の強敵に数度
交戦し黒海ハバチセ海の大戦を経て其法を得
也然るに千七百三十九年に至り四海
に吾國の船を出だすことを禁じたる也
女帝アナ崩ずる時に種々制令を遺勅し女帝エリザベト
の時に至りて國風を改め古俗を易て新法を布き
ものもてず瓜俗に格別に善良に傾き當今
女帝カタリナに至りて漸く開化に至り教化
日に増すべきなり古は婦人の猥褻なること
甚だしき伯多禄帝入名馬泥亜の猥を用ひて

風俗を学ひ心性白皙そのひそ面色のあるを
とゝく美なり

教法

厄力西亜の教法を奉しく千五百七年に永正四年厄力
西亜の教化主をむかへく謨斯可島に廟堂を建て
に見に名を改る法に羅馬人のめし仏その四人の頭上
より水を灌ぎて全身を洗ひ浸すと異なりそ
年長の人の教を捨く名を改ふ帝の法
旨を強く第四十二日その後前の教法を改むる時は
其人をさらしまゝて此をそる事古き教法を捨く

貴ぶ事を深くそる事此條詳なり強て解すそこの後ちの狂を絶
領油を塗り燭を点ず拾帝し心夫より七日の間
自己の心魂を祭り第八日に水に浴しく名を改む
ゆ是を亦仏多禄帝より其法を改めく天教を奉
常世に出より第又その法をかゆる事なし以下一向
に解しなし
姑閑し

習業

算数書法を学ぶ事を学ぶ仏多禄帝の時に
欧羅巴諸士より有名の学士を迎へく謨斯可島に学校
を建くまた法を教道せむ又各國の学法をかゝ

年初の志ありたれども数の学校なきこと甚なれその学業の永久ならんなほ未だ思ひくキラウあるもペテルスペルクに学校を設くること多く書籍を設け結構の典籍既に大道に合し人心に益有書をいとくに国語に訳しく刊行せしむ又千七百二十四年享保九年正月に入(ゼル)馬泥亜(ヤ)雪際亜(ヤ)。佛郎察(フランス)より幣礼を厚くして有名の師儒を招き御庫の書二千部を拝授して百藝窮理の書を編せしめ又百工の作院を設け其業を習はしめんと企てしかいはゆる四聖年千七百二十五年に享保十年崩しかの女帝女王即位ありて千七百二十六年に享保十一年学校を建て次就て其法蘭(フランス)ウェンクラ一歳の費用二万四千九百十二ルウデルス金銭の名数方作るなり其学四科を分つ所謂倜星学史書学窮理学度数学なり年毎に師儒おのくその生徒を考試しくまさるる者の姓名を書しくまふ又百工の作院に於ては活版の文字を鑄造典を刷印する書を模写する者を学ばしむ又玉工石工鏡工その他百工を教習するの費用年ごとに二万八千三百八十六ルウベルスなりまた学校の費用合せて五万二千二百九十八ルウベルスに典数育おのくの学術技藝

手奥妙を尽されたる日一日より小さくなりたる
又ペテルスベルグの学校中教科を主る医科（疾病を療する事を主る）道科（教化をおこなふ事を主る）四科を分ち日夜
和蘭諸研究せしめ寛保二年其述作の
書目を点検するに医科道科の書一万四千百八十七
巻国事を記したる書二百八十二巻ありて又千七百
十四年に正徳四年宝庫を設け天産人工の奇品異貨を
收貯し草木鳥魚各数百万に始伯多禄帝千
六百九十八年より元禄十一年和蘭の商人に雇はれ
来る千七百十六年に享保元年アルベルトスサバなる者禽獸魚蛇蝶
の属金石の類をダンウンシフ（ソロイセンの地）より所つ集め其
他佐国の金銀銭及び測量寫
物を送りしに千七百三十二年に享保十七年伯多禄帝の肖像を
送りしピエルドラ（ワカ）の我に相似られし衣甲を着せ
れを宝庫に置きしに後常に四方の奇品異貨宝（和）
物を集め今に至りて海内の珍奇物を
雑る物なく悉く備はれり
政治（此條宜名詳なるべきも略す）
昔西亜の君長ハホルスト将軍
ト大将軍なる手後カサール王
の伯多禄より所つ是なり其
詳なる事は解しがたく他に述べ
中頃ゴロートホルス

始て帝号を称す実に千七百二十一年享保六年のころ
其ころ度々格と帝号をねがひたてまつる千七百四十一
年に寛保元年ぽいに魯西亜に地しを当今女帝カタリ
十八千七百四十四年延享元年の七月九日に降誕あり千七百
六十二年に宝暦十二年即位ありし

兵制

魯西亜帝随身の兵常に三十万あり千七百三十一年
享保十六年女帝アナペテルスベルグに教場を設多く軍師を撰く
撰練教しむ又伯多孫帝高所徳海に七十二の戦艦
をはらくに軍を准備す第一等の船九隻毎船軍

探事補遺作五

卒五百島銃六十第二等の船二十隻毎船軍士三百六十
銃五十第三等の船五隻毎船軍士二百五十銃四十一第
四等の船十九隻毎船軍士一百八十銃三十四第五等の
船五隻毎船軍士七十二銃二十四火船四隻快船十八隻
捕盜船百隻合して軍士一万八千島銃二千五百元を
一隊とす
本国なる船艦造ることを為す故にペテルスベルグ及び
アルカンゲルに多く船匠をねつる免勢しく船を造らしむ
女帝カタリナの時軍船一百四十隻を造り軍士三万人
をのせ又千七百五十六年に宝暦六年軍船二十四隻快船七

隻駁船三隻走舸四隻を送り水軍一萬を增備ふ今
又ペテルスベルグより軍船百余隻をはこびをくり
いる
常歩二千萬ルウベルスを以て軍費とし一分は路費にあて
て一分は糧食ケステムベルデパヒール塩藏の物ケイズルレイキ
ドュイチン未詳えて一分は鐵ポフトアス灰汁の類大黄瀝
青魚油等の價にあてる

交易

此邦もつて交易を事とし元貨物幾他邦にあるを
お先に國の貨物を与給し他邦の風土を考て其
土の所産をもつて其類を換ることおよそ諸を要とする
千七百五十六年おいて宝暦六年交易のおくり物の金子三百五十
三萬六百十四ルーベルスとなる
欧羅巴諸國中国と互市をなる者諸入利要を第一とす
其交易を法とし他邦と異なる其次はデンマルク ハンセス
テンデン第那馬尔加ゝ地等の交易を以て盛なり其
互市の場はペーテルスベルグを最とする
支那の交易是まで絶しさ事なり貨物をおくる
お防冦軍を以て ゴカテ 奥利亜百尔西亜等の
互市を利とする事廣大なり冬は雪車をもつ

了 貸物を物語す

魯西亜志終

文化庚午季夏初四初五初六凡三日而寫完

古處堂主人友梅子識

壬申臘月十二日以昌平黌館藏書魯西亜志校之一過 朱書者

官庫魯西亜志也

支離不識

魯西亜國志世紀卷之一 零本

表音一本有之浦潘氏山村彙長 壹冊象齊亜志朋建后一編

教誡譯十二字

魯西亜國建國以来諸主之紀第一

凡魯西亜國ニ於テハ歴數千四百年（日本應永七年 建文二年）ノ比ヨリ
シテ始メテ史ヲ置テ事ヲ錄スコレヨリシテ上世ノ事ハ
皆口ヲ以テ傳フル者ノミ多キガ故ニ〻々遺漏アリテ
或ハ詳ナラザル者アリ初メ此國ノ諸州アツタニ分裂シ
テ群雄各一方ニ割據シ相互ニ地ヲ爭ヒテ戰爭止ム時
ナシ是時「ワレゴッセニ」ノ地ノ貴族ニ兄弟三人アリ共

ニ政治軍旅ノ事皆他ニ傑出シテ他部テコレヲ犯スコト能ハズ即チ漸々ニシテ悉クコレニ歸服セリ其三人長ヲ「ロリキ」ト云フ「ノボゴロド」等ノ諸州ヲ治メテ其都ヲ「ラフテガ」ト云フ高尓加河ニ臨ミテ「ホゴロド」ノ地ヲ去ルコト入尓馬泥亜國ノ里法ニテ凡三十六里（日本ニテ十二里）ナリ次ヲ「ヨナムス」ト云フ白海ノ諸州ヲ治ム其都城ハ州毎ニアリテ年々コレニ移リ居ル季ヲ「ロイウル」ト云「プレスコウ」等ノ地ヲ治メテ其都城ヲ「ヌウルヨク」ト云フ此三人共和シテ魯西亜ノ總国ヲ治メリ時ニ七百五十三年（日本天平勝宝五年唐天寶十二年）ナリ後ニ二弟先ダチ

一

子祖シテ遂ニ「ロリキ」一統シテ主トナルコレヲ魯西亜ノ太祖トス時ニ七百六十二年（日本天平宝字七年唐廣德元年）ナリ其後久シカラズシテ主祖ス其子「イゴル」位ヲ嗣ク年尚幼シ故ニ其族「オレク」政ヲ輔ク

「イゴル」年スデニ長シテ「オレク」ト共ニ大軍ヲ興シテ厄勒（ゲ）祭亜（ア）国ト戰ヲナシ深ク敵地ニ入テ其國都「コンスタンチノポレン」ニ至テ復國ニ還ル「キオフ」ノ地ヲ都トス「オレク」政ヲ輔クルコト凡ソ三十六年ニシテ卒ス「プレスコウ」ニ女主「オルカ」（一ニ「オラ」ト称ス）ナル者アリ主コレヲ納レテ妃トナス後數年ニシテ主又軍ヲ起シ

テ厄勒祭亜ヲ侵シ「ニコメヂン」ノ地ニ陣ヲ布キ敵ニ戰
テコレニ勝チテ數千人ヲ殺シ遂ニ輕騎ヲ進メテ「コレ
ス」ノ地ニ至リ「デルウサリアン」ノ兵ト戰テ殺ス因テ
其地ニ葬ル（「リュイスシュス」ノ書ニ曰ク「アゴル」厄勒祭亜ヲ侵シテ「ニコメヂン」ニ「イラケレア」等ノ地ヲ併セ進テ「ミルチテス」ノ地ニ至テ「デルウサリアン」ノ主ト戰テ殺スト）其子「コリチスラウス」年尚幼
シ故ニ其妃「オルカ」軍中ニ於テ位ヲ嗣テ政ヲ行ヒ「オルカ」位ヲ嗣デ「デルウサリアン」ノ主必其夫主ノ仇ヲ報
センコトヲ恐レテ計ヲ運ラシ因テ使ヲ遣シテ和ヲ乞
ヒ誓ヲ立ヲ其禮ヲ厚クシテ罪ヲ謝シ喪ヲ訪ヒ尋デ
又貴官五十人ヲ遣シテ種々珍奇ノ物ヲ具ヘ其貢物
禮節ヲ初ヨリモ殊ニ盛シニシテ婚姻ヲ結バンコト
ヲ請フ女主俾ヲコレヲ許シ其貴官ヲ禮シテ宴ヲナ
ス俄頃ニシテ五十員ノ貴官皆沈醉シテ知ルコトナシ
蓋酒中ニ藥ヲ施セルナリ是時ニ及テ伏兵出テ其五
十員ノ貴官オヨビ其從者ニ至ルマデ悉クコレヲ殺
シテ一人モ餘スコトナシ女主即チ其陣ヲ收メテ「キ
オフ」ニ還リ大ニ国中ニ仇ヲ報セントスルノ令ヲ傳
ヘテ勇悍ノ精兵ヲ募リ聚メテ復讐ヲ発シテ「デルウサ
リアン」國ヲ擊フ「デルウサリアン」ノ主コレヲ聞テ悉ク
國中ノ兵ヲ發シ陣ヲ構ヘテコレニ對ス女主其虚ヲ

何ヒ不意ニ出テ襲ヒ撃テ大ニコレヲ破ル「テルヴァリア」
ノ兵皆潰走ス女主賸ニ乗シ北ヲ逐テ遂ニ其都ニ
至ル「テルヴァリアン」ノ主城ニ嬰リテ固ク守ル女主即
チコレヲ圍ミ陣ヲ列チテコレヲ攻ムト雖トモ城中ノ
人敢テ出テ戦フコトヲナサズ且此城要害堅固ニシ
テ猝ニ抜クベカラス此ノ如キコト殆一年ナラントス
而シテ城中次第ニ窘迫ス魯西亜ノ兵亦稍糧ニ乏シ
是ニヨリテ「テルヴァリアン」ノ主又頻リニ和睦ヲ請フ女
主コレヲ許シテ和ヲ約シ糧食ニ充フルカ為ナリト
称シテ城中ノ家毎ニ生ケル鵠ニ頭ヲ乞テコレヲ得
タリ即チ其鵠ノ跗下ニ皆火球ヲ繫キテコレヲ放ツ
頃アリテ城中一齊ニ火ヲ発ス魯西亜ノ兵コレニ乗シテ
急ニ攻テ其城ヲ破リ城中ノ人民或ハコレヲ屠リ或
ハコレヲ俘ニシテ殘ス所ナシコヽニ於テ遂ニ其仇ヲ
報スルコトヲ得テ又「テルヴァリア」国中ノ諸城地悉リ
コレヲ取リ其國ヲ滅シテ魯西亜ノ郡縣トナシ凱ヲ
奏シテ「キオフ」ニ帰レリ　後歳月ヲ経テ厄勒祭亜ト
和睦ス
女主素ヨリ厄勒祭亜ノ教法ヲ仰望ス因テ使ヲ遣シ
其教ヲ請フテ灌頂ノ式ヲ受ク後遂ニ自ラ駕ヲ促シ

テ厄勒祭亜ニ至ル其行装極メテ荘厳ナリ即チ厄勒
祭亜ノ帝ニ見ハ道路ヲ授カリテ「ベレナ」ト云フ其随従
ノ男女モ悉ク其教門ニ入ラシム而シテ復「キオフ」ニ
還ルコレ魯西亜ニテ此教ヲ奉スルノ始メナリ故ニ後
世此女主ヲ尊テ「イニコ、ソリス」ト云フ（コレ日像ノ義ナリ言フコヽロハ其德ノ
萬代不朽ナルコト猶日ノ天ニ在テ亡ル古不易ナルガ如キヲ云フナリ）後其子「スワチスラウス」
年スデニ長シテ政ヲオサムベキニ至テ女主病テ殂
ス時ニ九百十七年（日本延喜十七年ニ当リ醍醐帝ノ時ナリ）
「スワチスラウス」（ニ「ストラウス」ト云フ）性猛勇ニシテ戰ヲ好ム位ヲ嗣
デ後恒ニ兵ヲ用ヒテ諸國ヲ侵伐シテ地ヲ拓クコト甚
廣シ　都ヲ「エロスラウ」ノ地ニ遷スコレ其国ノ中央
ナルヲ以テナリ「ノホゴロド」ノ州官ノ女「ミルスカ」ヲ納テ
妃トメ三子ヲ生ム長ヲ「エロポリクス」ト云フ「キオフ」
ノ地ヲ領セシム次ヲ「オレゴ」ト云「デルウ井リアニ」ノ地
ヲ領セシム季ヲ「ラロドミル」ト云「ノホゴロド」ノ地ヲ
領セシム　主素ヨリ厄勒祭亜ノ教ヲ信ゼズ今土地
ノ改ヲ以テ厄勒祭亜ヲ侵シ其二人ノ帝「バシリウス」
及ビ「コンスタンチニウス」（按スルニ厄勒祭亜ノ帝「バシリウス」既ニ立テ帝トナリテ後ニ其弟
「コンスタンチニウス」ヲ立テ亦帝トナシ二人心ヲ合セテ国ヲ治メシナリ故ニ此ニ二人ノ帝ト云フナリ）ト戰
テ屢コレニ勝チ多ク彼國ノ要害ノ地ヲ得タリ然ル

ニ「ピイルレ・ミゴル」ノ主「モリス」ナル者密ニ盗ヲシテ主ノ營中ニ入テ主ヲ害セシム「モリス」主ノ頭ヲ得テハテ酒盃トシコレニ鉛ヲ刻シテ曰ク「アリエナ、クレンス・プロプリア・ペルヂタ」トコレ窮極新奇自喪其身ト云ルコトナリ（窮極新奇トハ其恒ニ手生ヒガ本国ノ地ヲ以テ足レリトセズシテ兵ヲ以テ他国ノ地ヲ奪ントル欲セシヲ指テ云フモノニシ漢ニ驕武ト云フト同義ナリ）長子コレニ編ク

五

「エロポリクス」位ヲ嗣テ後ニ其大臣某等密ニ主ニ其二弟所有ノ地ヲ併セ一統ノ政治トナシテ其國本ヲ強クセンコトヲ勸ム因テ次弟「オレガ」ガ所領ノ「デル宰リアエ」ノ地ヲ奪テ「オレガ」ヲ遣地ニ謫ス其路ニ大河長橋アリ大臣謀リテ人ヲシテ「オレガ」ヲ橋上ヨリ墜シテ溺死セシム次弟「ラロドミル」コレヲ聞テ難ノ身ニ及バンコトヲ懼レテ其所領ノ「ハホゼロド」ノ地ヲ棄テ「ワスコイエモリ」ノ地ニ奔ル主ニ弟ノ地ヲ收メテ魯西亜總國ノ地ヲ有フ「ラロドミル」尚随身ノ衆數千人アリト雖トモ身ヲ容ル所ナシ因テ「キヨル」城ニ奔リ又「ロデン」ノ地ニ奔ル「ラロドミル」ノ臣密ニ謀ヲ設ケ使ヲ遣シテ陽ニ罪ヲ謝シ起宥ヲ希ヒ因テ陰ニ二人ノ力士ヲシテ宮ニ至リ其不意ニ出テ出ヲ弑セシム是ニ於テ「ラロドミル」「ノホゴロド」ノ地ニ還リテ衆ヲ安ンジ遂ニ魯

西亜ノ総国ニ主タリ

「ゾロドミル」位ニ即テ後奢侈豪蕩ニシテ専ラ遊宴ヲ事トス其侍妾八百人アリ然レモ性鷙猛ニシテ其勢強盛ニタヾ其国中ノミナラズ隣傍諸国ノ王侯モ皆コレニ畏服ス　主厄勒祭亜ノ二人ノ帝「バシリウス」及ビ「コンスタンチミス」ト好ヲ通シ交ヲ結ブコト甚深シコレ主厄勒祭亜ノ教法ヲ崇信スルニ因テナリ故ニコルシナ等数處ノ地ヲ厄勒祭亜ニ贈リ又彼國ノ貴族ノ妹「アンナ」ヲ迎ヘテ妃トス「ミースシウス」ニハ其帝ノ妹アンナニ作ル　主都ヲ嵩尔加「オツカ」両河之間ナル地ニ建テコレニ遷ル

主ノ名ニ因テ其都名ヲ縛羅斉抹児「ボラチメル」ト號スコレヨリシテ此國主數世コヤニ都ス　暦數一千年（日本長保二年宋咸平三年）ニ主厄勒祭亜ノ帝ヨリ道號ヲ受テ「バシリウス」ト號ス（「ミイスシウス」ニハ九百八十七年ノ事ナリトスヘリ九百八十七年ハ日本永延元年宋雍熙四年ナリ）厄勒祭亜教法ノ導師多ク魯西亜国中処ヒニ来テ教ヲ布ク都テ厄勒祭亜魯西亜両国相和スルヿ久シ一千零八年（日本寛弘五年宋大中祥符元年）ニ主祖ス此主厄勒祭亜ノ教法ヲ魯西亜國中ニ弘ムルノ始トス故ニ後世コレヲ尊ミテ毎歳七月十五日ヲ以テコレヲ祭ルナリ

主十二子アリ各一州ヲ分テコレヲ領セシム主祖スルニ

及テ各相争ヒ時ニ戦ヲナシテ止ミズ千十五年（日本長和四年宋大中祥符八年）ニ其十二子ノ一「ポロクス」ノ州主「マロスラウ」ナル者諸州ヲ併セテ魯西亜ノ総国ヲ一統ス

「マロスラウ」初メ「ウラウ」ヲ合セ有チ次テ「キオフ」ヲ奪ヒ又「テゼル」（以上皆地名）ニ克チ又波羅泥亜（ポロヂア）國ト戦フコト二回皆ユレニ勝ツ遂ニ千十五年（日本長和四年宋大中祥符八年）ヲ以テ魯西亜ヲ一統シテコレヲ治ム　千三十八年（日本長暦二年宋寶元元年）ニ波羅泥亜ト戦テ大ニユレヲ破リ千四十年（日本寛徳元年宋康定元年）ニ又厄勒祭亜ノ舟師ヲ破ル凡リ主一世ノ間ニ軍功甚多シト云フ（此主ノ事蹟原書ニ載セズ今「ゴフドリイド」「ロイスエス」等ノ書ニ就テコレヲ補フ）　千五十二年（日本永承七年宋皇祐四年）ニ主狙ス壽七十六ナリ五子アリ各既ニ一州ヲ領ス主狙シテ後亦相戦争シテ止ム時ナシ其五子ノ一ヲ「ウセラルド」ト云「ペ」スラウ々」ノ地ヲ治ム其子ヲ「ウラロドミル」ト云父之嗣ヲ嗣テ後ニ漸々ニ勢ヲ得テ分散シタル諸族皆ユレニ帰シ「スモレンスコ」「キオフ」縛羅弗（ウラロデメル）抹児ヲ撃テコレヲ併セ再ニ魯西亜ヲ一統ス

「ウラロドミル」デテウェエテ（テウェエデ八第二ト云フコトナリコ此國前代ニ「ウラロドミル」ト云ル主ニ因リテ第二世ト称シテユレニ別ツナリ）此主始メテ「モナルク」ト云ル尊號ヲ称スユレ大魯西亜ノ總王ト云ル義ナリ翁加里亜（ナニガリア）

ノ王「ゲイサス」トシバ〻〻戦ヲナセリ　千一百十六年（日本永久四年　宋政和六年）ニ主祖ス子「ウセウルド」立フ

九

「ウセウルド」位ヲ嗣テ後ニ波羅泥亜國王「ボレスラウス」勢盛ンニメ諸邦ノ敵ニ勝チ千一百三十八年（日本保延四年　宋紹興八年）ニ遂ニ魯西亞ヲ侵ス主軍ヲ帥ヒ迎ヘ戦テ大ニコレヲ破ル波羅泥亜ノ軍皆覆没ス「ボレスラウス」僅ニ免レテ遁レ去ル（「此事亦本書載ル所ナシ「ロイス」ヲ以テ「イド」ノ書ヲ以テコレヲ補フ）主六子アリテ又分地ヲナス即チ主祖シテ後ニ各其所領ノ地ニ據テ相戦ヒ国内分裂シ久シフシテヤヽ（「ボレスラウス」ノ死ニ近キ）コノ亂ニ乗シテ其境

十

外侵掠シ且国中數処ノ總兵官等亦其地ニ占據シテ他ノ命ヲ受ザルアリテ擾乱歳久シ千二百三十六年（日本嘉禎二年　宋端平三年）ニ至テ「ゼオルジウス・ゼオルジオヤフ」始メテ諸部ヲ統ベテ主トナル

十一

「ゼオルジウス・ゼオルジオヤフ」僅ニ一年餘ニシテ千二百三十七年（日本嘉禎三年　宋嘉熙元年）ニ其姪「ゼオルジウス・デメトリオヤフ」叛テ兵ヲ挙ゲコレヲ弑シテ自立ス

十二

「ゼオルジウス・デメトリオヤフ」位ヲ篡テ後シバシバ韃靼ニ敗ラル韃人勝ニ乗ジテ遂ニ又波羅泥亜ニ寇ス

凡魯西亜戦乱年久シク其兄弟叔姪交相争戦殺傷シ
加之東ノ方韃靼コレヲ侵シ今又西ノ方禮勿泥亜界
ニ侵ス凡二百四十年ノ間内骨肉相屠リ外隣国争戦
テ安處スルノ間幾モナシ

主祖シテ其弟「ヤロスラウ」
立フ

「ヤロスラウ・デ・テ宅エデ」(「テ宅エデ」ハ某ニ世ヲ位ヲ嗣テ云フ其義上ニ見ユ)
幾モアラザルニ禮勿泥亜ノ酋長「ベルニン・ツン・ハロク」
千二百四十年(日本仁治元年宋嘉熙四年)ニ魯西亜ヲ侵シテ「モス
コウ」ノ地ニ入ル主此戦ニ祖ス「ハロク」遂ニ「プレスコ
ウ」ノ地ヲ取ル主ノ子「ノホゴロド」ノ州主「アレ
キサンデル」位ヲ嗣グ

「アレキサンデル・子エフスケイ」ニシテ千二百四十一年(日本仁
治二年宋淳祐元年)ニ雪際亜ノ王ト「イングリア」ノ地ノ河上ニ
戦テ大ニコレヲ破ル雪際亜国震恐スコレニ因テ後
世主ノ名ヲ以テ此河ニ命シテ「子エバ」ト云フ(又ヨリ「ハ」ト云フ)
ナリ 千二百四十四年(日本寛元二年宋淳祐二年)ニ主軍ヲ帥テ
急ニ禮勿泥亜ヲ撃テ大ニコレヲ破リ其前ニ奪ハレタ
ル「プレスコウ」ノ地ヲ復ス 千二百六十三年(日本弘長三年宋景
定四年)ニ主病テ祖ス 縛羅弟抹児ノ都内ニ葬ル此主英
雄ニシテ国中帰服シ隣国畏恐ス故ニ国人コレヲ尊

ムテ聖トシテ今ニ至テコレヲ祭ル後来ノ聖主「ペテル・デン・
ゴロオテ」帝土宇ヲ開拓シテ新都「ペテルス・ブルグ」ヲ
築キテ千七百二十三年（日本享保八年清雍正元年）ニ新都ニ壮麗
ナル廟ヲ建テ此主ノ柩ヲ縛羅斯抹児ヨリシテ其新
廟ニ遷セリ（此主ノ事業本書タヽ「プレスコウ」ノ地ヲ復セル一事ノミヲ挙テ他事ヲ載セズ今「ヒブチルス」
ノ書ヲ以テコレヲ補フ）其宗室「ダニイル」ロオマノ家ヲ「コレニ嗣グ
「ダニイル」ロオマノ家ヲ先代ノ主「ウラロドミル・ダ・ゼエ
デ」ノ子「ウセラルド」ノ孫ナリ（本書「ダニイル」ロオマノ家ヲ「ノ條ニ註シテ曰ク或ハ曰ク
千二百四十六年ヲ以テ立ツト云云シカルトキハ上ノ「アレキサンデル」
ノ在位ノ内ニ係レリ而シテ「アレキサンデル」ノ事ハ「ヒブチルス」ガ所撰
ノ書オガラヒイ」「コウランテントルコ」ニ書ニ所載甚詳明ナリ）此主
ニ此ニハ「ヒブチルス」ノ説ニ従フ

始メテ魯西亜国王ノ爵ヲ受ク　韃靼邊境ヲ侵シテ
国益カラズ
「ダニイル」アレキサンドロ家ヲ「先主「アレキサンデル」ノ
子ナリ千三百年（日本正安二年元大德四年）ニ「ロオマノ家ヲ」ニ嗣
テ都ヲ「モスコウ」ニ遷シ古ヘノ聖人「アレキシウス」ノ
遺蛻ヲ「モスコウ」ニ安置シコレヲ奉シテ都ノ鎮守ノ
神聖トス此時ヨリシテ魯西亜国ノ別名ヲ莫斯哥未亜
国ト號ス　千三百零二年（日本乾元元年元大德六年）ニ隣国ト大
ニ戦フ初ハ波羅泥亜ノ王「ゼンセスラウス」次ニ里都
亜泥亜ノ国公ゼヂミン」トシハヽヽ兵ヲ交ユ此時波

羅泥亜ノ国亦安ナラス其大将「カミシル」ナル者延リテ魯
西亜ノ邊境及ビ「セリイン」（本書ニ「シベリイン」ニ作ル今地理ニ因テコレヲ改ム）「ホルヘ
イニイン」等ノ地ヲ侵掠シ又「スワルテ・リスラント」（上
国志初編ノ第一ニ見ユ則チ「ウクライナ」博タド略「キオフ」
里都亜尼亜ノ属州ナリ）
等ノ城池ヲ奪テ殆ンド波羅泥亜ノ總国ヲ有タントス
主始メテ莫斯哥未亜ノ「ゴロオト・ヘルトグ」（大公ノ義ト云ル
號ヲ兼子称ス　主姐ス五子アリ其長子「ゼオルシウス・
カリタ」コレニ嗣グ
セオルシウス・カリタ位ニ即テ後ニ其後兄「デメトリウス
ヒカエロ斧フ」叛テ主ヲ逐ヒコレヲ弑シテ自立ス

「デメトリウス・ヒカエロ斧フ」簒立シテ幾モナクシテ韃
靼ノ汗此国ニ侵シ入リ主ト戦テ其首ヲ斬ル
「イハン・カリタ」又名「ヨハンチス・カリタ」ト云フ先主「ゼオ
ルシウス・カリタ」ノ弟ナリ此時韃靼ノ兵尚未タ退カ
ズ主即チ使ヲ遣シテ金帛ヲ贈リ禮ヲ厚シテ和ヲ請
フ韃靼ノ汗コレニ因テ退キ帰ル　主三子アリ長ヲ「シ
メオン」次ヲ「ヨハンチス」少ヲ「アンデリイマ」ト云主姐
シテ長子コレニ嗣ク
「シメオン」チナリシテ姐ス位ヲ其弟「ヨハンチス」ニ傳フ
「ヨハンチス」又名「イハンイハノ斧フ」ト云此主在位ノ間

國中無事ナリ俎シテ子「デメトリウス」コレニ嗣ク
「デメトリウス」位ヲ嗣テ後ニ使ヲ遣シテ韃靼ノ汗ニ好
ヲ通スルコト前代ノ如クス然レドモ韃靼前代ノ時ヨリ
シテ多ク勝ヲ得タルコトアルヲ以テ氣驕リ魯西亞ヲ
侮リテ數々金帛ヲ索メテ止ニズ魯西亞コレヲ厭ヒ
患フ則チコレヲ拒ミテ戰復起ル且波羅泥亞里都亞
尼亞モ又魯西亞ノ界ヲ侵スコト時々コレアリテ互ニ
勝敗アリ後ニ主遂擊テ里都亞尼亞オヨビ波羅泥亞
ノ兵ヲ破ル
主韃靼ト戰フコト連年止ニズ千三百七十七年（日本永和
武十年明洪）ニ韃靼ノ汗「ミタイ」ト戰フコト二度韃人大
ニ敗レテ十三里（日本ノ二十六里）ノ間ニ死屍地ニ滿ツ「ミタイ」
亦死スコレニ嗣クノ韃靼ノ汗「タクタミス」又軍ヲ興
シテ「モスコウ」ニ寇ス主和ヲ乞ヒ彼軍ノ怠レルヲ伺
テ急ニ襲テコレヲ破ル韃人遂ク遁レ去ル
主既ニ韃人ヲ破テシハ々々勝利ヲ得タリ即チ又軍ヲ
帥ヒテ西ノ方里都亞尼亞ヲ侵シテ其「ニイウ空・ホイス」
ト云ル城ヲ攻メテ戰ヲナス敵人其城樓ノ窓ヨリシテ
矢ヲ放フ主コレニ中リテ俎スコレニ因テ全軍皆退
テ國ニ還ル時ニ千三百八十一年（日本永德元年明洪武十四年）ノ事

ナリ　主六子アリ長ヲ「ダニイル」ト云先ダチテ卒ス
故ニ其第二子「パシリウス」位ヲ嗣グ
「パシリウス」位ニ即テ専ラ心ヲ政治軍旅ノ事ニ用ヒ国
事大小補益スル所多シ但在位ノ間甚久カラズメ殂
ス其後妃「アナスタシア」遺腹ノ子「パシリウス」ヲ生メリ
然レトモ其宗室等主ノ正嫡ニアラサルカト疑ヒテ
主ノ弟「ゼオルグ」ヲ立テ位ヲ嗣シム
「ゼオルグ」立テ数年ノ後ニ其貴族大臣多ク先主遺腹ノ
子「パシリウス」ヲ仰望シテ密ニ共ニ廢立ノ事ヲ議ス
然レドモ小臣軍將等謀テ先主ノ子ヲ逐フ貴族大臣
計カス即チ先主ノ子ヲ再ビ迎ヘテ主ヲ和睦ヲナサ
シメ主百年ノ後ハ位ヲコレニ傳ヘンコトヲ約ス後幾
モナクシテ主殂ス先主ノ子遂ニ位ヲ嗣ク
「パシリウス・デ・ゼエデ」（「デ・ゼエデ」ハ第二世ヲ云フ其義上ニ見ル）立テ後ニ先
主「ゼオルグ」ノ昵近小臣等主ヲ廢シテ「ゼオルグ」ノ二
子「ヲンデレアス」「デメトリウス」ヲ立ンコトヲ謀テ密ニ
衆ヲ聚ムト雖モ都下ニ兵ヲ動スコト能ハザルヲハ
テ詐テ商賈ニ扮シ車中ニ兵器ヲ藏シテ都内ニ入リ
猝ニ起テ主ノ宮ニ乱入ス主コレヲ防グコトヲ得ズ
シテ逃レテ寺院ニ入ル兵士コレヲ捜シ出シ其眼ヲ

扶出シテ其妃ト共ニ「ウグリフス」ノ地ニ遷シ即チ先主ヲオルグ」ノ二子ヲ迎テ都ニ入ル大臣貴戚悉クコレニ服セズ共ニ誓ヲナシテ義ヲ聚ム二子コレヲ聞テ皆逃亡ス大臣等遂ニ賊徒ヲ平ゲ復主ヲ迎ヘテ重祚セシム然レドモ眼昏瞶冒ニ因テ其後幾モナクシテ病テ殂ス其子「ヨハンネス・バシリデス」位ヲ嗣ク　此主ノ正系後来ノ聖帝「ペテル・デン・ゴロオテ」ニ傳ルナリ「ヨハンネス・バシリデス」ノ孫ヲ「バシリウス・イハノヴィフ」ト云其子「ヨハンネス・バシリデス・テオエデ」ニ女アリ「ミリア」云「ミリア」一名「イコナニシア」ト云リ其兄「テオドルス・イハノヴィス」帝ノ世ニ至テ魯西亜ノ貴族「ヘドル・ニコロウィフ」(一名「ヘドル・ニキタ・ロウィフ」トモ云フ)ニ嫁シテ「ミカアル・ヘドロウィフ・ロマノフ」帝ヲ生メリコノ帝ハ即チ彼聖帝「ペテル・デン・ゴロオテ」ノ祖父ナリ

「ヨハンネス・バシリデス」ノ紀第二

「ヨハンネス・バシリデス」一名「イワン・ワシレイイウィフ」ト云フ此主聰明ニシテ智量アリヨク其群下ヲ御スルニ仁ヲ以テシテ国人感服シ干戈ヲ動スコト稀ナレドモ隣邦自ラ帰降シ偶々兵ヲ用ユルコトアレバ必勝ザルコトナシ地ヲ拓クコト甚廣クシテ威德四遠ニ軍

ビ魯西亜ノ帝業ヲ成セルコト實ニ此主ニ基ヅケリ故ニ
莫尓大未亜國ノ主「ステハノス」ガ曰ク奇ナル哉「ヨバ
ン子ス」靜坐シテ眠ルガ如ク惟其封彊ヲ固クシテ干
戈ヲ動サザレトモ其國日ニ強大ナリト
主「テオドル」ノ主「ミカアル」ノ妹「マリア」ヲ娶ル「ミカアル」嗣
ナシ後遂ニ國ヲ主ニ付ス「マリア」子「ヨハン子ス」ヲ生
ム「ヨハン子ス」長シテ後ニ莫尓大未亜國ノ主「ステハ
ノス」ノ女ヲ娶レリ
其後「マリア」殂ス時ニ遷馬之東帝(即チ厄勒祭亜ノ帝ヲ云ナリ)「エマニ
ウル」ノ子「トオマス、パレオゴニス」ナル者其國破レテ

其兄「コンスタンテイン」亡シテ後(昔シ曆數三百餘年ノ
タンテインゴロオト」新都ヲ厄勒祭亜国ニ遷テ遷馬ノ帝「コンスタンチ
ノポル」ト名ケ其邊ノ地ヲ新遷馬ト稱シコレヲ以テ東都
トシ古ヘノ遷馬ヲ西都トス其後「カアレルゴロオテ」帝西都
ヲ入尓馬泥亜国ノ「空子ン」ノ地ニ遷シテ入尓馬泥亜ノ別名
ヲ又遷馬聖国ト稱スコレヨリシテ入尓馬泥亜ノ帝ヲ
称シテ遷馬ノ西帝ト云ヒ「コンスタンチノポル」ノ帝ヲ
ヲ遷馬ノ東帝ト云ヒ又厄勒祭亜ノ帝トモ称シテ其ニ
歐羅巴正統ノ帝ナリ然シテ西帝ハ今ニ至テ極メテ
隆盛ナレドモ東帝ハ千四百五十三年(日本享德二年
明景泰四年)「コンスタンテイン」第十五世ノ帝ノ世ニアタリテ
都児格ニ破ラレテ国亡ビタリ初メ「コンスタンテイン」コロオ
ト」帝東都ニ遷テヨリ此ニ至テ凡一千一百二十二年ナリ然
レトモ厄勒祭亜ノ帝號ハ魯西亜ニ傳ヘテ今ニ至テ
コレヲ称スルナリ○「エニミウル」第二世ノ帝ハ在位三十
年ニシテ千四百十六年(日本応永二十三年)明永樂十四年)ニ殂
ス其太子立テ「ヨハン子ス」第七世ノ帝ト称ス千四百四
十四年(日本文安元年明正統九年)ニ殂ス子ナシ故ニ其
弟主テ「コンスタンテイン」第十五世ノ帝ト称ス後都児

（格ニ破ラレテ國ヒビタリ）其衆ヲ帥ヒテ「ペロポネンシス」（厄勒祭亜ノ南方邊海ノ地ナリ）ノ地ヨリレテ羅馬ニ奔テ居住セリ二女アリ長ヲ「ヘレナ」ト云既ニ「セルヒア」國ノ王「ラサルス」ニ嫁セリ次ヲ「リヒア」ト云猶未ダ人ニ嫁セズ千四百六十五年（日本寛正六年）（明成化元年）ニ「トオニス」病テ卒ス（後）六年ニシテ主コレヲ聞テ即チ「リヒア」ヲ迎ヘテ妃トス「リヒア」其父「トオマス」ヨリ所傳ノ厄勒祭亜ノ尊號オヨビ厄勒祭亜帝ノ寶號兩頭ノ鷲紋ヲ此國ニ傳フコレヨリレテ主即チ厄勒祭亜ノ大統ヲ承テ魯西亜今ニ至テ兩頭鷲形ヲ以テ國寶トナスナリ（而シテ魯帝號ヲ称セルハ後来ノ聖主「ペテルデン」ノ時ヨリシテナリ）世ニ或ハ傳フ此国ニ於テ兩頭ノ鷲紋ヲ厄勒祭亜ヨリ傳ヘタルハ「ヨハンチスバシリス・デ・テ左エデ」（「テ左エデ」ハ第二世ヲ云フ此主ノ子ト下ニ詳ナリ）ノ世ニアタレリト然レトモヨク コレヲ詳ニスルニ厄勒祭亜ノ皇女「リヒア」此國ニ嫁セル時ニ所傳ノ者トルコト明ニシテ證スヘシ

「リヒア」性剛勇ニシテ智勇人ニ過ク魯西亜先代ヨリシテ韃人ト好ヲ結ブコト久シク其通聘ノ禮節相齊シク韃人先世ニ魯西亜ニ住トナリシ者ホタクモスコウノ都内ニ居住スル者アリ其種族繁茂ス「リヒア」コレヲ聞テオモヘラク魯西亜既ニ厄勒祭亜ノ大統ヲ承ケ

テ其尊キコト帝者ニ齊シ豈韃靼遠鄙ノ國ト其禮ヲ
齊フスルノ理アランヤト即チコレヲ主ニ勸メテ次第ニ
其禮節ヲ改メシメ又都内ニ寶刹寺觀ヲ增シ造リ有
名ノ教師ヲ具ヘテ專ラ教化ヲ弘ムルニ及テ「モスコウ」ニ
所居ノ韃人亦悉ク魯西亞ノ教法ニ入テ皆一心ニコレ
ヲ崇奉ス妃即チ使ヲ韃靼ノ汗ノ妃ニ遣シ禮物ヲ遺
リテ曰ク頃日一靈夢ヲ感ズ天告テ云ク先代侔ニセシ
所ノ韃靼ノ種族皆コレヲ本國ニ歸ラシメヨト因テ天意
ニ順テコレヲ還サントスル願クハコレヲ許セト韃
靼ノ妃コレヲ聞テ其汗ト議リテコレヲ許ス妃即チ
命シテ「モスコウ」ニ所居ノ韃人ニ悉クコレヲ諭シ賞賜
ヲナシテ皆其本土ニ還ラシム韃人各其本土ニ還リ
テ魯西亞ノ恩惠ニ感シテ其德ヲ宣揚シ亦各其所受
ノ教法ヲ近鄰ニ弘ムルニ因テ韃靼諸州ノ人翕シク魯
西亞ノ法教ニ化シテ地ヲ挙テ魯西亞ニ内屬スル者日ニ
多シ因テ次第ニ「モスコウ」ヨリ守ヲ置テコレヲ治メテ
尚教化ヲ布キ韃靼ノ汗モ敢テコレヲ制スルコト能
ハズ魯西亞ノ人干戈ヲ用ヒズシテ地ヲ開クコト極メテ
廣ク其勢日ニ盛ンニ韃靼ノ地大ニ蹙リテ加山國ノ王モ
僅ニ其封疆ヲ保フノミニシテ魯西亞ニ敵スルコト能ハズ

即チ「モスコウ」ノ都内初メ韃人居リシ所ノ地ニハ皆寺
觀ヲ建立シテ國内モホマスマヽ治ニリ隣國波羅泥亜
等モホ魯西亜ヲ恐ルヽニ至レリ
「ノホゴロト」ノ地ハ商賈湊會富饒ノ都會ニシテ昔ヨリ魯西
亜ノ有タリシニ先代ノ時千四百二十七年（日本應永三十四年明宣德二年）ニ里都亜尼亜ノ主「アレキサンデル・ネフトホルド」
ニ奪ハレテ今波羅泥亜ノ地トナリ（波羅泥亜ト里都亜尼亜トハ始メハ別國タリシガ其後里都亜尼亜ノ國公波羅泥亜ノ王ノ婿トナリテ王位ヲ嗣ギシヨリ合シテ一國トナレリ）歳
毎ニ賦十萬「ルウベルス」（金錢）ヲ貢ス主コレヲ復スルノ
意アリ即チ千四百七十年（日本文明二年明成化六年）ヲ以テ大軍
ヲ帥テ「ノホゴロト」ノ界ニ陣シテ屢々勝利ヲ得タリ
波羅泥亜ノ王「カシミル」衆ヲ帥テコレヲ救ハントス
レドモ魯西亜ノ猛威ヲ恐レテ敢テ進マス兵如此スル
コト七年ヲ過テ魯西亜ノ兵遂ニ「ノホゴロト」ノ全地ヲ
奪テコレヲ復スコレ千四百七十七年（日本文明九年明成化十三年）
ノ事ナリ時ニ厄勒祭亜ノ教法ノ「アールフ・ヒスヲプ」
（僧官ノ長）「テオヒルス」ナル者此州ニ在テ久シク教ヲ施シ
士人悉クコレニ歸ス魯西亜國昔ヨリシテ此教ヲ宗
トス主ホ最コレヲ崇信ス故ニ此士人皆魯西亜ノ今ニ
隨フコトヲ樂ムデ一州都テ平治シテ遂ニコレヨリシ

テ永ク魯西亜ノ郡縣トナレリコレ此州ヲ奪ヒ復セル
ハ全ク主ノ兵威ニ因リ又此州平治シテ速ニ魯西亜ノ
王化ニ服セルハ全ク「テオヒロスト」ガ教導ノ功ニ因レリ
是ニ於テ主此地ノ富戸ニ分ノ一ヲ「モスコウ」ニ遷シ
尋デ千四百七十九年（日本文明十一年 欧化十五年）ニ又此地ニ厄
勒祭亜教ノ寺觀ヲ建立シテ益々土人ヲ教導シ彼ヒ
年ノ間ノ鬪爭ニ因テ分散シタル商賈ノ徒モ亦再ビ
此ニ鳩集シテ交易ヲナシ人悉ク恩惠ニ懷キテ其富
饒繁華ナルコト昔ヨリモ勝レリ故ニ其時ノ諺ニ云ヘリ
誰カ天ニ勝ンヤ誰カ「ノホゴロド」ニ勝ンヤトコレ此
書ノ初編「ノホゴロド」ノ條ニモ説ク所ノ者ニシテ即チ
主ノ威德ヲ賛称セル者ナリ
是時魯西亜ノ勢益盛ニシテ數々里都亜尼亜ノ地ヲ侵
掠シテ多ク勝ヲ得ルト雖ドモ波羅尼亜ノ人敢テ魯
西亜ニ敵シ爭フコトヲ得ズコレ數年前ヨリシテ波
羅泥亜ノ王「カシミル」其隣國博厄矣亜ノ地ヲ得ンコト
ヲ欲スルニ因テ翁加里亜ノ王「マツチアス」ト爭戰スルコト
既ニ久シク頃ロ始メテ和睦ヲナシテ國中稍靜ナリト
雖ドモコレニテ數年ノ爭戰ニ因テ財力虛耗シテ國
人兵ヲ厭フニ因テ今又新ニ兵ヲ興シテ魯西亜ト地

ヲ爭ヒ、戰ヲナスコト甚難勞ナルヲ以テ屢々使ヲ遣シ
テ和ヲ乞ヒ封彊ヲ保タンコトヲ欲スルナリ
此間ニアタリテ主又新ニ隣國ヲ開キ得テコレヲ從屬
セシムルコトヲナセリ「セヘリイン」ノ地ハ其幅員一百
五十餘里（日本ノ三百餘里）昔ヨリ里都亜尼亜ノ屬州タリシガ
須臾里都亜尼亜ヨリ其人ヲ虐用スルニ因テ土人コレ
ヲ苦ミ怨ム且「セヘリイン」ノ人ハ皆厄勒桀亜ノ教ヲ
奉スルコト魯西亜ト同シクシテ波羅泥亜里都亜尼
亜トハ教門ヲ異ニスルガ故ニ皆魯西亜ニ屬シテ里都
亜尼亜ニ畔カンコトヲ欲ス（波羅泥亜里都亜尼亜ハ運馬ノ教ヲ奉スルナリ）是
ニ於テ「セヘリイン」ノ酋長「窄ルナ」（里都亜尼亜ノ都府）ニ至リ
謀ヲ設ケテ其地ヲ奪テ共ニ魯西亜ニ屬セント欲セシ
ガ其謀成ラス即チ「セヘリイン」ニ還リテ衆ヲ以テ里
都亜尼亜ヨリ所置ノ守兵ヲ逐ヒ其地ヲ舉テ魯西亜
ニ内附シテコレヨリシテ遂魯西亜ノ郡縣トナレリ
千四百九十年（日本延德二年明弘治三年）ニ筋加里亜國王「マツチアス」
卒スチナシ波羅泥亜王「カシミル」其長子「ウラヂスラウス」
ヲ以テ博厄美亜ノ王トシ次子「ヨハンチス・アルベルトス」
ヲ以テ筋加里亜ノ王トセンコトヲ欲シ「フルキイシング」
ノ例ヲ以テ彼二國ノ人ニ說キテコレヲ送テ其界ニ

入ル（元ノ西洋ノ諸国ニ「エルフ」「ルキイシング」ノ二種
アリ「エルフ」トハ相傳ト云コトニシテ歴代子孫
傳統ノ国ヲ云フ佛郎察以西把尼亜波尔杜尼尔諳厄利
亜弟耶瑪尔加等諸国此例ヲ用ユ「ルキイシング」トハ
撰擇ト云コトニシテ子孫相續ノミニ限ラズ其国ノ王族或ハ
他国ノ王子ニテモ其人物并ニ官爵年齢等ノ順次ニ因テ
擇テ其位ヲ嗣クヲ云フ波羅泥亜翁加里亜等諸国此例ヲ用ユ）然レドモ翁加里亜ノ人
或ハ「ヨハンネス・アルベルトス」ニ説テ先代（即チ其故王「ヲチアスガ
時ヲ云フナリ）ノ時ノ如ク二國ヲ合セ治メンコトヲ勸ムユ
ニ因テ兄弟國ヲ爭テ大ニ戰爭ヲナシ波羅泥亜亦コ
レヲ制スルユト能ハズ千四百九十一年（日本延徳三年明弘治四年）
ニ「ヨハンネス・アルベルトス」大ニ敗レテ僅カニシテ波
羅泥亜ニ逃レ歸リ又其衆ヲ帥テ魯西亜ノ境ニ寇ス

主即チ命シテ軍士ヲ整ヘ封疆ヲ固クセシメテ以テコ
レニ備フ是歳波羅泥亜ノ王「カシミル」卒ス「ヨハンネス・
アルベルトス」即チ其位ヲ嗣キ先ニ魯西亜ノ界ヲ侵
セシコトヲ悔テ和ヲ乞モナクシテ故ナキニ兵
ヲ興シ莫尔太未亜國ヲ侵シテ其主「ステハノス」ト戰
ヒヲナシ「ステハノス」ニ敗ラル加之韃靼オヨビ都児格
マタ莫尔太未亜ヲ援ケテ屢々波羅泥亜ノ境ヲ侵シ
テ剽掠ヲ恣ニシコレニ因テ國中甚静ナラズ即チ又
使ヲ魯西亜ニ遣シテ其魯西亜先ニ得ル所ノ波羅泥
亜ノ諸地（即チ上ニ云「ノホゴロド」「セヘリ」イン諸州ノ地ヲ云ナルベシ）ハ永世魯西亜ノ有

トナシテコレヲ爭フベカラザルコトヲ誓ヒ二國和睦シテ他邦（韓鞮都兒格等ヲ云フナルベシ）ノ敵ヲ共ニ協力シテコレヲ防ガンコトヲ約セシコトヲ請フ

此時波羅泥亞ノ王「ヨハンチス・アルベルトス」ガ弟「アレキサンデル」ハ里都亞尼亞ノ地ニ在テ其國公タリ波羅泥亞ノ本國頻年治ニラザルヲ見テ密ニコレニ背キ魯西亞ノ援ニ因テ自立セントスルノ意アリ然ルニ今波羅泥亞ヨリ魯西亞ニ和ヲ求メ盟ヲ請フヲ見テ甚其望ヲ失ナヒ即チ又謀ヲ廻ラシテ魯西亞ニ婚ヲ求メ且里都亞尼亞ノ地ヲ経畧シテ魯西亞ノ教ヲ弘メテ魯西亞ノ援ヲ得ンコトヲ請フ主ホ新地ヲ開キ教化ヲ弘メントスルノ意アリ因テコレヲ許シ主ノ後ノ妃「ソヒア」ノ所生ノ女「ベレナ」ヲ以テコレニ妻ハセ兵ヲ援ケンコトヲ約ス「アレキサンデル」即「ポオルセ・プロイセン」ノ諸州「ベレシナ」河ニ至ルマデノ地ヲ経畧シ先ニ「窄ルナ」ノ府内ニ尼勒祭亞ノ教法ノ寺觀ヲ建テ并ニ尼勒祭亞ノ教ヲ「スクルテ・リュスランド」（里都亞尼亞三部）ノ地ニ弘ム千五百年（本明應九年弘治十三年）ニ主又三隊ノ兵ヲ遣シテ道ヲ分テ彼地ニ入テ「アレキサンデル」ヲ援ケ又一軍ヲ遣シテ波羅泥亞ノ「スモレンスコ」ノ地

ヲ侵シテエレヲ破掠ス波羅泥亜ノ大将「オストロオキ」兵ヲ帥ヒテ「ウェドラス」河ニ於テ魯西亜ノ軍ノ後隊ヲ襲撃シトノ反テ魯西亜ニ敗ラル「アレキサンデル」又悼厄美亜（此時「アレキサンデル」ガ長兄「ウラヂスラウス」此国ノ主タリ）「シレシア」「モラヒア」等ノ地ヨリモ新ニ援兵ヲ得テ其勢益盛ニシテ遂ニ自立ノ業成リ波羅泥亜ノ勢甚衰ヘリ

千五百零二年（日本文亀二年明弘治十五年）ニ主兵十三萬人ヲ遣シテ禮勿泥亜ヲ撃タシム禮勿泥亜ノ主「ゴロオド・メエステル・ハン・ドイツヒ・オルデ」（亦馬泥亜ノ帝ヨリ「ウラウテル・ハン・プロテンベルグ」衆ヲ帥ヒテ迎ヘ戦テ大ニ敗ル禮勿泥亜ノ兵死スル者一萬二千人即チ頻リニ和ヲ乞ヒ「プレスコウ」ノ地ニ於テ其和ヲ約シ自後五十年ノ間干戈ヲ動サザルノ誓ヲナス「モスコウ」ノ都ニ遣シテ恒ニ方物ヲ貢ス

主其子「デメトリウス」ヲシテ兵ニ将トシテ波羅泥亜ヲ征シ其「スモレンスコ」ノ地ニ戦テ頻リニ勝利ヲ得タリ而シテ此時波羅泥亜ノ王「ヨハネス・アルベルトス」卒シテ子ナシ（按スルニ「ロイスシュ」ガ西洋全史ニハ亟ニ「ヨハンシュス」ノ書ナヨビ「ヨハネス」ト記セリ）國人其弟里都亜尼亜ノ主「アレキサンデル」ヲ迎テ波羅泥亜ノ王位ヲ嗣ガシム「アレキサンデル」千五百零一年ニ

ハ素ヨリ魯西亜ト睦シ其妃「ヘレナ」ト共ニ厄勒茶亜
ノ教ヲ里都亜尼亜ノ地ニ弘ム今本國ノ王トナリテ
二國ヲ合セ治ムルニ及ンデ又使ヲ魯西亜ニ遣シテ
和親ノ事ヲ議ス主ユレヲ許ス即チ魯西亜波羅泥亜
互ニ其先ニ俘ニセシ人ヲ送リ還シ千五百零三年（日本文龜三年明弘治十六年）ニ和約ヲナシ波羅泥亜ノ國モ亦大ニ安キ
コトヲ得タリ

主五子アリ而シテ魯西亜先代ノ主多クハ其諸子ニ分地
ヲ與ヘ動モスレバ兄弟位ヲ爭ヒ戰ヲナシテ國亂ルタノ
弊ニ懲ル因テ其長子「ヨハンネス」（ユレ上ニ所云ノ前ノ后「マリア」所生ナレヘシ）
ヲ立テ魯西亜太子ノ號ヲ授ケテ預メ衆心ヲ鎮ム然
レ𪜈太子ハ主ニ先ダチテ卒ス太子生ム所ノ子「ガブ
リイル」ハ主ノ最愛スル所ナリ主今既ニ老タリ因テ
「ガブリイル」ヲ立テ嗣トナシテ位ヲ傳ヘントスシカレ
ニ主ノ次子「デメトリウス」年長ジテ大位ヲ嗣ントスル
ノ意アリテ其端スデニ露ハル主即チ「デメトリウス」ヲ
責テコレヲ因ヘ遂ニ「ガブリイル」ヲ立テ儲嗣トナス
千五百零五年（日本永正二年明弘治十八年）十一月ニ主殂ス國人其德ヲ
尊ムテ稱シテ「ゴロヂン」ト云フ（コレ謚號）即チ大尊ノ
義ナリ主智勇大略アリ兵ヲ用ユレハ必勝フ故ニヨク

隣邦ノ諸強國ヲ併セテ地ヲ拓クコト極メテ廣ク曾
テ加山國ヲ破リテ其王ヲ擒ニシ韃靼ノ諸州ヲ取ルコト
甚多ク白米米稚「ユゲレス」莫尓加耳・止白里等ノ諸國
皆歸服シテ毎歳貢ヲ獻ズ雪際亜國ノ王ノ如キモ甚
コレヲ畏レテ恒ニ聘使絶ヘス狄ニ千四百七十九年
(日本文明十一年明成化十五年)千四百九十五年(日本明應四年明弘治八年)千四百
九十六年(日本明應五年明弘治九年)ノ三年ニハ夥シキ寶物ヲ貢
セリ(按スルニ此ニ雪際亜ノ王ト云フモノハ即チ羅耶瑪加ノ王ナリ古ヘヨリシテ雪際亜ニハ王アリシガ
千三百九十五年ニ弟耶瑪尓加ヨリコレヲ侯セ奪テ弟
耶瑪尓加ノ王マタ雪際亜ノ王位ヲモ兼子称セシガ千
五百二十五年ヨリシテ又分レテ別國トナリシナリシカレ
バ此ニ所言ノ年數ハ弟耶瑪爾加ノ「キリスチアノス」王オヨビ
其子「ヨハン子ス」王ノ雪際亜ノ王位ヲ兼シ時ニアタレリ)又禮勿泥亜ヲ破テコレヲ服
シ里都亜尼亜ノ地ヲ取ルコト凡ソ七十餘所又曾テ
「イハノゴロド」ノ堅城ヲ築クニ指揮宜キヲ得テ其功
速ニ成リ以テ韃人ヲ鎮壓シ又始メテ國都「モスコヴ」
ノ周圍ニ堅固ナル墻ヲ築テコレヲ環ラス其他功業
甚多ク魯西亜ノ帝業成就セルコト實ニ此主ニ賴レ
リ群臣国人尊歸ヲ上リテ縛羅得抹兒莫斯哥未亜「ノ
ホゴロド」ノ大君大魯西亜ノ総王ト称セリ惟性酷ダ
酒ヲ嗜ミ醉ニ至ラザレハ止マラズ故ニ宴享ノ事アル
毎ニ終ニハ几ニ伏シテ睡ル其醉ヘルニ當テハ左右

近侍動モスレバ則チ小事ニ因テ呵叱ヲ蒙ルタヾ重爵
ナキノミ其喜ブニ當テハ則チ自ラ醉フノミナラズ
衆人ヲシテ皆痛飲シ醉ヲナシテ以テ各其歡ヲ極メシ
ム若飲マサル者ヲバ亦コレヲ叱メ強テ飲シメテ遂
ニ醉ニ至ラシム惟此酒ヲ嗜ムノ一事ハ以テ盛德ノ累
トスベシト云其儲嗣ガブリール位ヲ嗣ク

文化庚午季夏八日寫完凡二日而竣

乙未五月八日草ヽ讀過

古處堂主人支離子識